エミール・ハウスクネヒト

――日本滞在の以前と以後――

竹　中　暉　雄

はじめに

エミール・ハウスクネヒト（Emil Paul Karl Heinrich Hausknecht, 1853～1927）の名前は，日本の教育学者の間では古くから広く知られてきた。1897（明治20）年，帝国大学お雇い外国人教師として，初めてヨーロッパの教育学，とりわけヘルバルト主義教育学を体系的にもたらし，その後の日本の教育学の基礎を築いた人物だからである。現在のところ，ハウスクネヒト雇い入れの経緯，日本での活動と思想とを一番くわしく明らかにしているのは，外務省や文部省，東京大学，国立公文書館などの所蔵文書を使った寺崎昌男と樽松かほるの共同研究である。しかもそこでは，「個人的関心においてもまた日本当局者の期待においても，諸『学校令』体制下の中等教育の構築を進めるべき立場にあったこと」「特約生教育学科の創設と運営も，もちろん中等教員養成こそがその眼目であった」ことが強調され[1]，したがってヘルバルト主義の普及というのは，いわば彼の活動の副産物的な功績であったと，従来の定説とはまた違った新しい視点が提出されている。

ところでハウスクネヒトがどのような経歴と思想とをもって日本にやってきたか，帰国後の彼がどのような職に就きどのような活動を行なったかにつ

1）寺崎昌男・樽松かほる「エミール・ハウスクネヒト研究」，教育史学会『日本の教育史学』第22集（1979年10月）16頁。その他，寺崎・樽松「特約生教育学科とドイツ人教師エミール・ハウスクネヒト」『東京大学史紀要』2号（昭和54年），『東京大学百年史』通史1「特約生教育学科の設置」参照。

いては，これまでの先行研究では若干の断片的経歴，例えば，帰国後キールのオーベル・レアル・シューレの校長になったとか，1907年ころスイスのローザンヌ大学で英文学の講義をしていたとかを除いては，ほとんど何も分からないというのが実情であった。またその断片的経歴にも，寺崎・榑松「共同研究」も認めているように，未確認の情報が多かった。本稿は，日本でのハウスクネヒトの活動を理解するうえでも重要となる，彼の伝記的側面を少しでも明らかにすることをその課題としている。

西ドイツでは，ハウスクネヒトはいわゆる教育学者としては全くその名を知られていない。教育学関係の事典や人名辞典の中に，その名を見つけることはできない。また何十巻にも及ぶ大部のものを含む一般的な百科事典・人名事典にも，彼の名は掲載されてはいない[2)]。

ハウスクネヒトについての記述を載せているほとんど唯一の事典の類は，『キュルシュナー・ドイツ文学年鑑』[3)]である。初出は1906年版（1906年1月31日序文）であるが，そこでは彼はキールの改革実科ギムナジウム校長として，1908年版からはスイスのローザンヌ大学「教授」（本当は員外教授）として紹介され，専攻分野は言語学・教育学となっている。つまり後述するようにハウスクネヒトはドイツでは，むしろ英語教育学者あるいは英語・英文学者として，その名を残していたのである。

たとえ断片的なものであってもハウスクネヒトについての記述を載せてい

2）例えば，J. C. Poggendorff; *Biographisch-Literarisches Handwörterbuch*（Leipzig, 1863年，第1巻，現在続刊中）

Allgemeine Deutsche Biographie（inkl. Nachträge）（1875～現在，56 Bände）

Neue Deutsche Biographie（1953～1985，続刊中）

3）Hersg., Heinrich Klenz; *Kürschners Deutscher Literatur = Kalender*（Leipzig, G. J. Göschen'sche）

4）Jürgen Plöger; *Geschichte der Humboldt-Schule in Kiel*（Mitteilungen der Gesellschaft für Kieler Stadtgeschichte, hrsg., von Jürgen Jensen, Band 71, Karl Wachholtz Verlag, Neumünster,1986）

る書物などほとんど無い状況の中で，1986年に貴重な本が刊行された。キール市史協会報告書の第71巻，J．プレガー著『キール・フンボルト学校史』[4]である。ハウスクネヒトが校長をしていたことのある改革実科ギムナジウムが，実はフンボルト学校と名を変えて今もなお同じ場所に存続していたのである。この『学校史』は現在のところ，ハウスクネヒトについて少しでもまとまった記述をしている唯一の刊行物であろう。ただしハウスクネヒトがローザンヌ大学員外教授になったことは，この書では一言も書かれていない。

以下では，キール市の公文書室（Stadtarchiv Kiel）に保存されていた「ハウスクネヒト一件書類」（以下 SAK と略し必要に応じて文書の日付を付け加える）を主たる資料とし，またこの『学校史』などの助けを借りつつ，「日本滞在以前と以後」のハウスクネヒトについて紹介する。

I

ベルリンの北西（ポツダムの北北西）約60kmの所に，北西から南東にかけて細長くルッピン湖が横たわっていて，その北端にアルト・ルッピン（Alt-Rüppin），その少し南西にノイ・ルッピン（Neu-Ruppin）という町がある。このあたり一帯は現在，風光明媚な保養地になっているが，エミール・ハウスクネヒトは，1853年5月23日，このプロイセン・ブランデンブルク，ノイ・ルッピン郡トレスコヴ（Treskow）に，「庭師の息子」[1]として生まれた。1872年春，地元のフリードリヒ・ヴィルヘルム・ギムナジウムを卒業した後，73年にかけてベルリン大学で古典語・近代語そして歴史学を学んだ。しかし1873年秋にはパリに渡り，高等技芸学院（École pratique des hautes Études）の入試に合格し，同校および，パリ古典学校（École des Chartes）や

1）彼が後に取得した中等学校教員資格の「証明書」による（SAK，1879・2・25）。

コレージュ・ド・フランス（Collège de France）で，ロマン語，特にフランス語の勉強に没頭した。その間，74年および75年の夏はロシアで過ごしている。76年春，パリを去って今度はイギリスに渡ったハウスクネヒトは，その夏，ロンドン郊外の Great Ealing School でアシスタント・マスターとして働いたが（23歳），同76年秋には再び勉学を続けるためにドイツに帰り，そしてすぐ冬学期からベルリン大学に再登録した。[2)]

当時の名簿[3)]で確認してみると，再入学後の彼は，1876年の冬学期（76年ミカエル祭９月29日～77年復活祭），77年夏学期（77年復活祭～ミカエル祭），77年冬学期，そして１学期休んで78年冬学期の計２年間，哲学部に在籍している。半年間の休学が何を意味するのかは分からないが，休学後の名簿では，彼の名は補遺の中にあり，しかも住所はそれまでの「ケプニカー通り67」から「ヴィルヘルム通り59」に，また専攻も言語学から哲学に変わっている。

ハウスクネヒトが再入学した1876年冬学期，ベルリン大学には総計2490人の学生が登録していて，その学部別内訳は次のようであった。

哲学部　139名（プロイセン129，非プロイセン10）
法学部　1003名（プロイセン869，非プロイセン134）
医学部　281名（プロイセン196，非プロイセン85）
哲学部　1067名（プロイセン845，非プロイセン222）

非プロイセン人合計 451名中，ドイツ帝国以外のヨーロッパ諸国からの留学生は 161名，非ヨーロッパ諸国からは54名となっていて，その内訳を見ると，ヨーロッパの大学というものの国際性がよく分かる。

ヨーロッパ諸国

ギリシャ９，英国11（内スコットランド１），イタリア８，オランダ６，オー

2）*Jahresbericht der Ober-Realschule mit Reform-Realgymnasium in Kiel über das Schuljahr 1900-1901*, Kiel, 1901, s. 25 および SAK, Personalbogen.

3）*Amtliches Verzeichniß des Personals und der Studirenden der Königlichen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin.*

ストリア24（内ハンガリー14），ルーマニア14，ロシア61，スイス22，セルビア3，スペイン1，トルコ2

非ヨーロッパ諸国

アフリカ4，アメリカ45，アジア4，オーストラリア1[4]

ハウスクネヒトがここで中等教員資格を取得したこと，また後にヘルバルト主義教育学を持って日本にやって来て，全くヘルバルト主義に基づく小冊子『教育学汎論』を残していることからすると，彼はベルリン大学再入学後の2年間のうちに，ヘルバルト主義教育学，あるいは少なくとも教育学の勉強もしたはずである。そのころのベルリン大学の教育学担当者は誰だったのであろうか。一人は，フリードリヒ・パウルゼン（Friedrich Paulsen, 1846～1908）である。彼は1875年6月19日にベルリン大学私講師となり，1878年8月10日員外教授，そして1893年に哲学・教育学教授となっている。今一人はモリッツ・ラツァルス（Moritz Lazarus, 1824～1903）で，1873年5月28日，哲学名誉教授としてベルリン大学に招聘されている[5]。このうちラツァルスは，『教育と歴史』（1881）の著書があるヘルバルト派の教育学者である。そして1876年5月4日，ヘルバルトの生地オルデンブルクで行なわれたヘルバルト生誕100年祭の記念碑除幕式では，ヘルバルトについての講演を行なっている[6]。その彼やパウルゼンが，ハウスクネヒト在学中にヘルバルトに関する講義をしたかどうかは重要なところであるが，当時の講義要項を見ても以下のような記述しか掲載されていなく，残念ながら確認は出来ない。

教育学，パウルゼン博士，月曜日，火曜日，木曜日，金曜日，9～10時，課外（privatim）[7]

4）*ditto*, Auf das Winterhalbjahr von Michaelis 1876 bis Ostern 1877.

5）Johannes Asen; *Gesamtverzeichnis des Lehrkörpers der Universität Berlin*, Bd. 1（1810～1945), Leipzig, 1955, s. 146, s. 113.

6）W. Rein h. g., *Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik*, Bd. Ⅲ, s. 555.

7）*Verzeichniss der Vorlesungen, welche auf der Friedrich-Wilhelms-*

教育学および教授学，ラツァルス教授，月曜日，火曜日，木曜日，金曜日，12～1時，課外[8]

なおパウルゼンがベルリン大学で最初の教育学講義を行なったのはハウスクネヒト再入学の翌年1877年であり，1887年までに 268名の受講者を引きつけた。これは当時としては大変な数であったという[9]。彼が，名著『学者的教育の歴史』によって賛否両論からの注目を集めたのは，1885年になってからであるが，それ以前の講義の中にもこの思想が展開されていたと考えて当然である。同書の最終章は，ギリシア語やラテン語の強制をしなくても中等教育や大学教育での真理探究や批判的理性になんら差し障りはないとして，伝統的ギムナジウムを強く批判したのである[10]。ハウスクネヒトがパウルゼンの直接的影響を受けたかどうかは分からないが，彼の教育思想には明らかに実学的発想がみられる。また日本では，ギムナジウムでも実科ギムナジウムでもなく，むしろ上級実科学校のそれに一番近いカリキュラムと統一学校の思想を生かした中等教育制度改革案，つまり『山口高等学校教則説明書』を作成することになる。

1879年2月25日，ハウスクネヒトは中等学校教員資格を学術試験委員会から認定された。その証明書には試験結果が詳しく記述されていて，例えば，「ペスタロッチ教育学の主要功績についての課題論文は，その論題を不十分でない方法で論じている。口頭試問で志願者が哲学および教育学について示した知識は，さらに満足のいくものと判断される」などとある。そして彼は，英語・フランス語をギムナジウムおよび実科学校の全学年で，ドイツ語・ラテン語を下級・中級の学年で教える能力を持っているとの1級証明書を得る

Universität zu Berlin im Winter-Semester vom 16. Oktober 1877 ～6. April 1878. 1878-79 Winter-Semester でも全く同様。

8）*ditto, vom 16. Okt. 1876 bis 17. März 1877.*

9）James C. Albisetti, *Secondary School Reform in Imperial Germany*, Princeton University Press, 1983, p. 130.

10）*ibid*, p. 10.

ことができた（SAK）。

1879年3月には博士号も取得して，大学を卒業した。学位論文は，「中世英詩“バビロンのサルタン”の原典と言語」であった。1年間の徴兵義務をベルリンのカイザー・フランツ近衛歩兵第2連隊で果たした後，教育界に職を得るための努力を重ねた。1880年から81年にかけてベルリンのライプニッツ・ギムナジウムで試補期間を終え，同時に80年夏学期には「学問的補助教員」として王立フランス語ギムナジウムでも働いた後，「正教員」の資格を得た。1881年春からはベルリン・ライプニッツ・ギムナジウムの正教員になり，同年の夏期休暇には研究のためにイギリスへ旅行した。1882年春，ファルク（Falk）実科ギムナジウム[11]に転任したが，その10月から1年間の休暇を与えられたので，その間1ケ月をブリュッセル，9ケ月をパリ，2ケ月をロンドンとオックスフォードで過ごした。パリ滞在中には，フランスの中等教育制度についての研究もした。また1886年の夏期休暇にも，研修のためにエディンバラ，オックスフォード，ケムブリッジ，そしてロンドンを訪れている。[12]

ハウスクネヒトは1886年までにいくつかの業績を発表している。処女作は，ロンドンで英語で出版された『バビロンのサルタンのロマンス』（1881）[13]であるが，これは故トーマス・フィリップス卿の原稿に，ハウスクネヒトが解説と注・グロサリを付けたものである。彼の学位論文のテーマでもあった『バビロンのサルタン』（1400年頃）とは，いわゆる「フランスもの」と呼ば

11）東京大学蔵『雇外国人教師講師名簿』（明治2年～昭和2年）が「伯林府フォルク，リアルジムナシアム教諭」と記しているためか，日本の多くの文献・教育事典などでは，「フォルク」とか「フォルクス」実科ギムナジウムと誤り伝えられている。

12）以上 *Jahres-Bericht der Ober-Realschule mit Reform-Realgymnasium in Kiel über das Schuljahr 1900-1901*, Kiel, 1901, s.25～26.

13）*The Romaunce of The Sowdone of Babylone*（The English Charlemagne Romances, Part V）London, 1881.

れる，「シャルルマーニュ大帝とその武将たちについての武勲を歌った概して短い叙事詩集」の１つである。サルタンのバランが，その子の巨人フェルンブラスの力を借りてローマを襲い，キリストの十字架，荊の冠，釘などの遺物を奪ってスペインに送ってしまう。しかし結局は，シャルルマーニュの軍隊がサラセン軍を破って遺物を奪還し，フェルンブラスもオリヴァーに負けて，ついにキリスト教に改宗するという物語である[14]。

次に，「フランスの韻文冒険物語の最も古く，最も甘美なものの１つ」[15]といわれる「フロワールとブランシュフロール」(Floire et Blancheflor, 1250年ころ，作者不詳）を源流にもつ中世イタリア詩と中世英詩についての研究が２つある。『フィオリオとビアンチ・フィオーレの歌』(1884)[16]と，『フローリスとブランチェフルール』(1885)[17]である。後者の第１部は，この叙事詩がイギリス以外の土地，つまりフランス，ドイツ，スカンディナヴィア，イタリア，ギリシャ，スペインそしてポルトガルにどのような形で広まっているか，第２部は，①イギリスに残されているこの詩の手書き原稿，②音声（母音・子音），語形（名詞・形容詞・代名詞・動詞），方言，文字にされた時期など，要するに詩の言語，③韻律，④フランスのオリジナルと英詩との関係などについて論じている。

国によって若干の相違は生まれているものの，もともと「フロワールとブランシュフロール」とは，イスパニアの王子フロワールとフランスの貴族の娘ブランシュフロールとが数奇を極めた一大冒険の末ついに結ばれるという恋物語であり，東洋的エキゾチズムに溢れた詩である。

14）『講座英米文学史』(詩Ｉ）(大修館書店，1977）202頁。

15）斎藤勇主幹『世界文学辞典』(研究社，昭和29年)。

16）*Il Cantare di Fiorio e Bianci-fiore* (Braunschweig, 1884)

17）*Floris and Blauncheflur* (Sammlung Englischer Denkmäler in Kritischen Ausgaben, 5. Band) Berlin, 1885.

18）*Auswahl Französischer Gedichte* (Französische und Englische Schulbibliothek) Leipzig, 1885.

ハウスクネヒトのこの頃の業績の第4，第5は，『仏詩選集』(1885)[18]と『英詩選集』(1886)[19]である。共にエルンスト・グロップ（Ernst Gropp）との共編による教科書で，大変よく使用された様である。前者は1908年に18版（1911, 123T），後者も同年に15版（1911, 60T）を重ねた。『英詩選集』は，シェイクスピア，ミルトン，ポウプ，ワーズワース，スコット，クーリッジ，キーツ，シェリーなどイギリス詩人，エマソン，ロングフェロウ，ポウなどアメリカ詩人，そしてオーストラリア詩人の作品148点を年代順に収録している。

ところで1880年代の中等教員の世界では，古典語の詰め込みに対立して教授法への関心が大きくなってきていた。中等学校の授業にヘルバルト主義を採用することを主張する雑誌がいくつか刊行され，従来の「演繹的方法」に対する「帰納的アプローチ」が論じられていた。また教員養成の方法をめぐっての激しい論争も起こっていた。ギーセンのシラー（Hermann Schiller）やフランケ学院（ハレ）のフリック（Otto Frick）は，ギムナジウム付属の小さなゼミナールでの養成を支持するのに対して，イエナのW. ラインたちは，大学での学問的訓練と統合された養成を要求していたのであった[19]。

さてこのような状況下の1886年11月15日，ハウスクネヒトは日本に向けベルリンを発った。教育学・独逸語学のお雇い教師として帝国大学へ招聘されることになったからである。そして彼は，大学での中等教員養成の仕事にかかわったのであった。なお彼が招聘を受けたのは，ベルリンのファルク実科ギムナジウム在職中のことであって，「ハンノーバーにあったエミール・ハウスクネヒトの來朝を求めその承諾を得た」[21]というのは，何かの間違いであろう。

---

19) *Auswahl Englischer Gedichte* (Französische und Englische Schulbibliothek, Band XI) Leipzig, 1886.

20) James C. Albisetti, *Secondary School Reform in Imperial Germany,* Princeton University Press, 1983, p. 131.

21) 東京帝国大学編刊『東京帝国大学学術大観』昭和17年，429頁。

途中，マルセイユ，エジプト，インド，中国に寄港し，55日後の翌年1月9日に横浜港に到着した。ハウスクネヒト，33歳半ばのことであった。

II

3年半の滞在を終え，ハウスクネヒトは1890（明治23）年7月4日，日本を発った。今度は彼は北アメリカに寄り，4ケ月にわたって大学見学をしたり教育制度の研究を行なった。ヴァージニア州ノーサンプトンにある「黒人・インディアンの為の師範・農業学校」も訪問している。さらにイギリスでも2～3週間，特にいわゆる「大学拡張」に関した教育制度の研究に没頭した。そのためドイツにたどり着いた時には，もう1890年の年末となっていた。

在日中には，「任期満るに及びて本国に帰りケーニグスブルヒ大學の英文學教授とならんといふ」とも伝えられていたが[1]，これは実現しなかった。その代わりハウスクネヒトは1891年4月1日から，ベルリン第2実科（中等市民）学校へ招かれることになり，1892年秋からはベルリンのヴィクトリア・リツェウムの英語学・英文学講師を兼ねた（1895年春まで）。

その間，1891年から1894年の休暇は，イギリス，ベルギー，ノルマンディ諸島への3つの研究旅行に利用している。また1893年の夏から秋にかけては再度アメリカへの調査旅行を行ない，これまでの調査結果を翌年の春に『アメリカの教育制度』(1894)[2]として，同校の研究年報に発表・掲載した。また同94年には，英語とイギリス事情についての教科書『英語学生』[3]を出版した（これもよく使用されたらしく，1914年に第14版が出ている。また彼自身が

1）『教師之友』14号，明治21年5月25日。

2）*Amerikanisches Bildungswesen*, "Wissenschaftliche Beilage zum Jahresbericht der Zweiten Städtischen Realschule (Höheren Bürgerschule) zu Berlin", R. Gaertners Verlagsbuchhandlung, Berlin, Ostern 1894.

3）*The English Student—Lehrbuch zur Einführung in die englische Sprache und Landeskunde* (Verlag von Gideon Karl Sarasin) Leipzig, 1894.

使用した)。さらにまた同じ1984年の夏，シカゴ万国博覧会のためのプロイセン文部省特別任命委員としてアメリカに数ケ月間派遣され，特にボストン，セント・ルイス，ワシントンにおいてアメリカ人の生活と教育制度について学ぶ新しい機会を持ち，ワシントンでは合衆国教育長官W. T. ハリスの大歓迎を受けることができた[4]。

ところで『アメリカの教育制度』は全29ページの小論文ではあるが，ハウスクネヒトが残した唯一の教育学関係論文であり，数年前まで日本にいた彼がアメリカ教育に対してどのような印象を抱いたか気になる所なので，以下少し詳しくその内容を紹介することにする（残念ながら日本と比較した記述は一言も出て来ないが)。

*　　*　　*

ハウスクネヒトは，そのころのアメリカには「ほとんど激情にまで燃え上がった，知識と教養に対する高貴な欲求」が存在していて，教育制度が非常に整備されてきていることを認めている。けれども彼によれば，ドイツと比較すればまだまだその水準は低いのであり，疑問な点も多いのである。

例えばアメリカの約400あるカレッジは「我が国のギムナジウムと大学との中間の学校」「一種の上級ギムナジウム」にすぎず，ドイツの大学とは次のように違うのである。「(アメリカの) カレッジのほとんどは知識の伝達という目的しか持っていないのに対して，我が国の大学の主たる任務は自立的な学問的研究への指導であり，たいていのカレッジはこのこととはほど遠い」。「男女共学」というアメリカの特徴も，「応急手段」としての価値しか持っていない。なぜならそれは，少年と少女の発達の相違を原理として否定しているからである。アメリカで「共学」が可能なのは，要するに学校が楽だからというわけである。

アメリカ教育をあまり高く評価しないハウスクネヒトであるが，ハイスクー

---

4) 以上 *Jahres-Bericht der Ober-Realschule mit Reform-Realgymnasium in Kiel über das Schuljahr 1900-1901*, Kiel, 1901, s. 26.

ルやカレッジの多くが贅沢な設備を持った極めて優れた体育館を所有していることについては，感嘆の言葉を残していた。けれどもハウスクネヒトによれば，「こうした部分的にはまさしく模範的な体育施設の存在にもかかわらず，一般的には体育はドイツよりも遅れている」のである。

アメリカのハイスクールの特徴の１つに，学習内容に関係する文献やポピュラーな学問的書物を利用するように導いたりすることがある。しかしこれもハウスクネヒトに言わせれば，一部は「教師たちの素養にしばしば非常に差があるので，参考文献の中から信頼出来る教材を生徒達に与える」ためであり，しかし一部は「自立への教育の努力」のためということになる。

「模倣する価値のある設備」は，「連続的黒板」である。この黒板は，扉や窓があるところを除いて四方の壁にしっかりと嵌め込まれていて，図表や作家の言葉，処世訓などが貼られる場所でもある。また，いくつかのカレッジで採用されているサバティカル・イヤーの制度，つまり「自己の学問の一層の発展」と「旧世界の新教授法吸収」のために７年目毎に与えられる休暇年のことも，まずは中等学校の近代語教師に対してからでもドイツに導入されるべき優れたものとして，紹介されている。

以上のようにアメリカ教育を見る彼の目は，全体として極めて皮肉で厳しいが，それは何故だったのであろうか。カレッジでスペイン語学習の機会が多いことに関連して述べている次のような文のなかに，その理由が見つけられるのではないか。

このことはラテン・アメリカ諸国との古い関係のためであるが，最近になってこのコースが特に増やされたのは多分，「汎アメリカ的欲望，およびアメリカ以外の諸国家，とりわけドイツを南アメリカとの通商から駆逐しようとする努力と極めて密接な関係」があるのである。「純粋に商業的な見地からすれば」，現在ドイツ人にとってもスペイン語の勉強は非常に重要である。フランス語に劣らず大切である。しかし「その両者よりもっと重要なのは，全地球上に広まっている世界語つまり英語についての可能

な限り深い知識である」

1880年代に入って，ドイツの植民地主義は急速に展開されて行った。アフリカにおけるドイツの植民地のほとんどは，1884年と85年に獲得されている。他方アメリカでは，1850年に農業と工業の地位が逆転していたが，1890年に国勢調査局によって，アメリカにおけるフロンティアがもはや消滅してしまったことが発表され，厳しい保護関税主義をとりつつ，国外に市場と原料地を見つけることが求められていた。国務長官ブレインの提唱で，1889年10月2日，第1回汎アメリカ会議がワシントンで開催され，中南米の18ケ国が加盟する汎アメリカン・ユニオンが結成されたが，「これはまったく対ラテン＝アメリカ貿易を促進しようというアメリカの意図から出たもの」だったのである。そしてアメリカの工業総生産額は，ハウスクネヒトがこの論文を書いたまさしく1894年に，「イギリス・フランスの合計をも越し，世界第1の工業国になった」のである[5)]。

アメリカ教育に対するハウスクネヒトの，しばしば毒を含んだ評論は，このような世界情勢を背景にした彼のナショナリズムの所産だったのである。

*　　*　　*

ベルリン・第2実科学校の正教員をまる4年勤めて42歳を迎える1895年の4月1日，ハウスクネヒトは新設されたベルリン第12実科学校の校長に任ぜられ，この学校を基礎から作り上げることになった。同校第1年報によれば(SAK)，彼は1895年夏学期，フランス語12時間，歴史2時間，冬学期はフランス語12時間を担当している。そして1900年春までに36人のアビツア合格者を送り出すことが出来た。1895年から1900年にかけて，毎年彼は休暇には研究のために，イギリス，フランス，北イタリア，ジュネーブへ出掛けている。

5）清水博編『アメリカ史（新版)』(世界各国史8）山川出版社，昭和44年，216頁，198頁。

学校外での活動も多忙を極めるようになってきた。1895年には，W．ライン編集の『教育学百科事典』に「英語教育」を執筆した。ハウスクネヒトとラインとの関係については谷本富が，「(両氏は）相識る淺からず，後年余輩をライン氏に紹介したるもその因縁なり」と記している[6]。1897年夏，エディンバラ大学の夏季講習で近代語教授法に関する講演を行ない，1898年と99年の夏，および1899／1900学校年には，プロイセン文部省が校長・師範学校教員のために設けた継続教育コース（ベルリン）の講師を務めた。また1899／1900年の冬には，ギムナジウム女性正教員試験委員会特別委員に任命されている（ベルリン)[7]。

有名な『教育学百科事典』に掲載された「英語教育」は，29項目，11頁にわたる論文であり，内容的にはいわゆる「直接教授法」を推進しようとするものであった。20世紀への転換期には，古代ラテン語・ギリシャ語の文法を丸暗記させることによって記憶力の形式陶冶をしようとしたり，訳読を中心としてきた伝統的な教授法を古典的な旧式として批判し，話すことに力点を置いたより実用的な外国語教育を追求しようとする新しい動きが，起こりつつあった。「直接教授法」とはそうした試みの総称であるが，後の「口頭教授法」とは違って，学習初期の書き作業は禁止したりせず，読み物教材も全く排除するわけではなく，また補助的に視覚的な作業も利用する方式であった。

ハウスクネヒトのこの論文の立場は，「尊重することが繰り返し勧められながらすぐに忘れられてしまう」次の２大原理を強調する点にあった。

(1) 教授の３段階

①個々の事項の無意識的な知覚

②個々の事項の意識的な知覚，同時に法則の無意識的な予測

6）『最新教育学大全』上，同文館，大正12年，28頁。

7）*Jahres-Bericht der Ober-Realschule mit Reform-Realgymnasium in Kiel über das Schuljahr 1900-1901,* Kiel, 1901, s. 26.

③法則の意識的な認識

(2) すべての語学学習は事物授業でもなければならない。

この(2)に関してはすでに，エラスムスやその他の人文主義者，その後はコメニウス，ヘルバルトなどによって要求されてきたという[8]。

こうした立場からハウスクネヒトは，例えば，「英国人の，彼らの国の，生活の，文化発展の理解」に同時につながらないような内容の読本とか，丸1年経っても必要な日常用語やイギリスに特徴的な表現が出て来ず，逆に「禽龍」（イグアノドン）といった化石語を覚えなければならないといった当時の有名入門書を批判した。

教授の3段階は「ゆっくりと進行」しなければならないが，そのエッセンスは次のようにまとめられている。

具体的な基礎なしに抽象化をすることは間違っている。たくさんの直観材料から育って来るような抽象化なら，ベターである。一番完全なのは，既に習慣になっていて，無意識的に感情の中に移ってしまっている直観材料から生じるような抽象化である。しかし習慣は，機械的な作業・練習を前提にしている。ゆえに，外国語文法の理解が最も素早くそして永続的に行なわれるのは，数多くの機械的な練習によって既に無意識的に感情の中に移行し習慣になってしまっている言語的諸様相を，反省的に秩序づけてまとめあげるようにこの抽象化がなされる時である。最初から文法規則に絶えず注意を払えば，無意識的な習慣が機械的に獲得されることを妨げてしまう。ゆえに，語学を素早く学び，文法を永続的に理解するためには，始めは本来の文法事項や母国語との比較は出来るだけ除外し，反対に外国語の諸様相に対する無意識的・習慣的な感情の陶冶を促進するような訓練で外国語授業を始めなければならない。[9]

8）Englischer Unterricht, W. Rein (hrsg.) *Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik*, I, Langensalza, 1895, ss. 838～839.

9）*Ebenda*, s. 839.

ところでハウスクネヒトは，一方で外国・外国人理解のための外国語教育ということを述べながら，他方では「この20年来の我が国の産業・通商の繁栄・発展が，その基本的知識を持っていることを否応無く要求するような，極めて広く普及した生きた言語が重要なので，ドイツの学校は，“Non scholae, sed vitae discimus”（学校のためにではなく，人生のために学ぶ）という不変の言葉を銘記して，まず第1に，交際・交流のための生きた言語を教えなければならない」とも主張している[10]。つまり，単に外国文化理解のためだけではなく，ドイツ経済繁栄のための英語教育という観点が，「アメリカの教育制度」におけると同様に，彼の考えの基盤にはあるのであった。

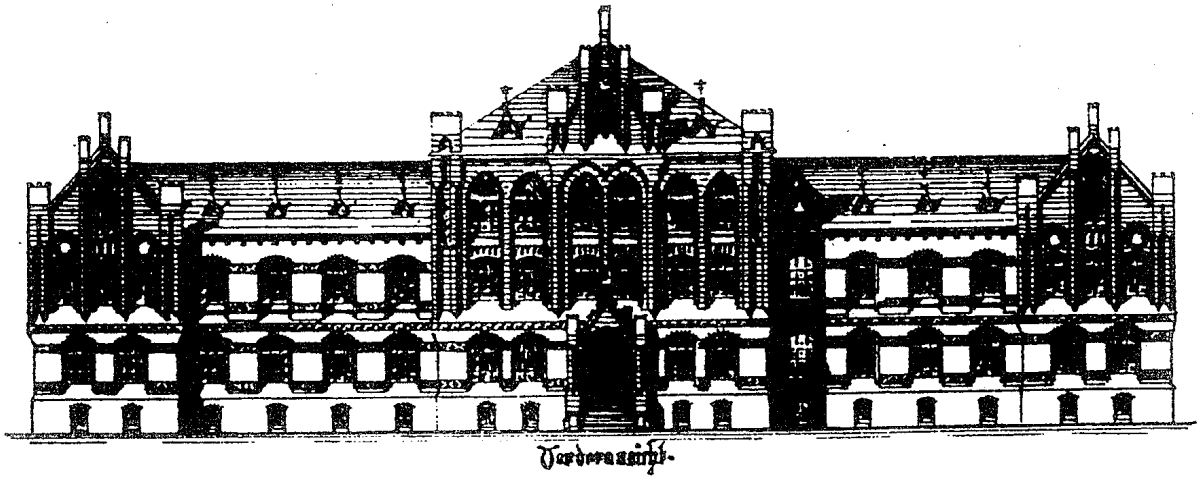
なお『山口高等学校教則説明書』では，「英語教授ハ高尚ナル志想ノ為メニ艱難辛苦シ此志想ノ為メニ生レ此志想ノ為メニ死シタル人物ヲ生徒ニ示シ以テ其徳性ヲ喚發スル」といった道徳的課題をも英語教育に認めていたが(51頁)，この論文「英語教育」においてもやはり，教材選択の第1原理の中で，ヘルバルト主義者よろしく「倫理的理念」ということを述べていた[11]。

Ⅲ

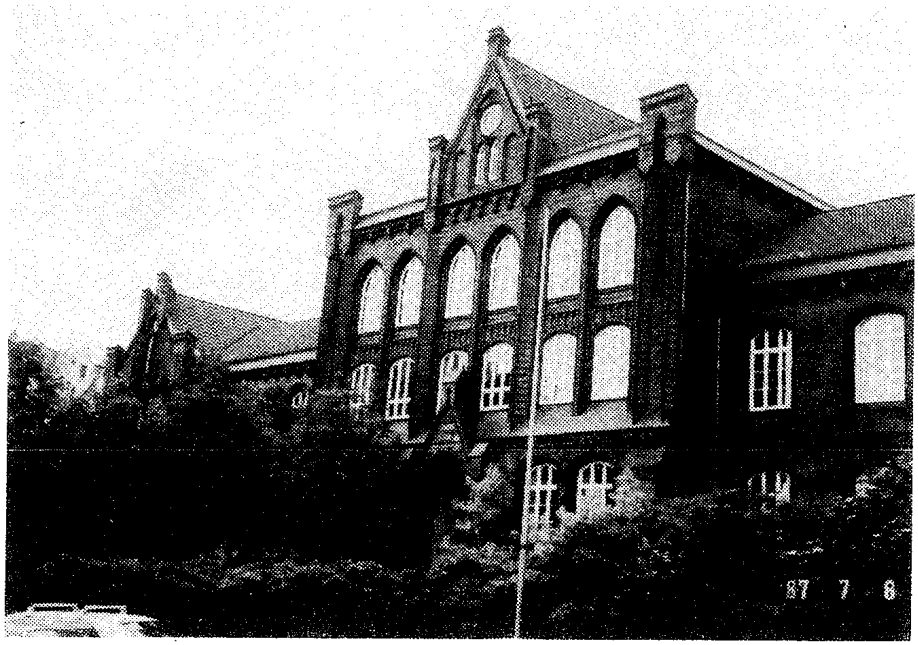
さてちょうどこの頃，キール市がギムナジウム校長にふさわしい人材を探していた。1899年6月に死去した改革実科ギムナジウム校長ルッペ（G. Luppe）の後任である。同年7月15日，市長に対しハウスクネヒトを推薦する文書が提出され，その推薦の理由としては，英語に堪能であること，優れた業績と評価され多くの学校で使用されている教科書『英語学生』を執筆していること，イギリスや日本での長年の外国体験で，世界の見聞を広め先見の明を身につけていること，近代語教授法の改革に努力していることなどが挙げられていた（SAK)。9月15日のキール市上級実科学校委員会は，ハウ

10）*Ebenda*, s. 841.

11）*Ebenda*, s. 845.



1900年から1906年にかけてハウスクネヒトが校長をしていたキール実科学校の正面図（1877～1908）
出典：Jahres-Bericht üder die Realschule in Kiel, 1877／78, s. 3.



現在のフンボルト・シューレ（筆者撮影）

スクネヒトについてなお詳しい調査を開始し，視学官をベルリンに派遣して彼の授業を参観させることにした（SAK)。

委員会の審査に合格し，雇用条件も決まったので，９月30日に市長のフス（Fuss）がその旨をハウスクネヒトに知らせ，彼は10月２日，電報で「承諾」を伝えた。雇用条件は，ａ）赴任費用は国の基準で支払う，ｂ）住居費はキールでは現在のところ1000マルク，ｃ）給与は年7200マルク，３年後7500マルク，というものであった。さらにまた，退職時には年金算定勤務年数の中に日本での在職年数を加えることも決定された（SAK，1899・10・10，10・13)。こうして12月11日にはシュレスヴィヒ・ホルシュタイン王の裁可を得て，1900年４月20日，同ギムナジウムは関係者・生徒・一般市民多数を迎えて同校講堂で新校長の就任を祝ったのである（SAK)。

ハウスクネヒトのこの新しい学校は，もともとは1861年10月21日に「中等男子市民学校」(die Höhere Knaben-Bürgerschule）として開校されたもので，創設当初の生徒は５学年260名であった。1882年には，３学年の予備学級と９学年とから成る「上級実科学校」として認められ，1896年には生徒数671名を数えるまでに発展した。『蜜蜂マーヤ』(1912）で知られるボンゼルス（Waldemar Bonsels, 1880〜1952）がこの学校に最初に入学したのは1889年春のことで，1892年秋に再入学して第５学年（Obertertia）まで進み，1896年春，16歳の時に「商人」という評価をもらって学校を去っている[1)]。

ちょうどその頃にはこの学校は，より高度の資格を与えるために，純粋に学問的なギムナジウムと上級実科学校との中間にある実科ギムナジウムへの改組が課題となっていた。

当時のドイツの中等教育界は，伝統的ギムナジウムと実科ギムナジウムそして上級実科学校との間の激しい「学校戦争」の渦中にあった。人文主義に対する実科主義からの挑戦というこの問題は，とりわけギムナジウムのみが独占していた大学入学資格を実科中等学校にも与えよという点に象徴されて

1）*Geschichte der Humboldt-Schule in Kiel*, s. 73.

いた。1850年頃から特に活発化した産業化の影響を受けて，プロイセンで初めて実科系諸学校を独立の中等学校として認めたのは，1859年10月6日の「実科学校および高等市民学校の教授・試験規程」であるが，この中では，ラテン語必修で9年制の第1級実科学校というのが定められていた。1873年10月にファルク文相が開いた学校会議でも，この学校に大学入学資格を認めるかどうかが激しく議論されたが，しかし決着は見られなかった。

他方，1870年代から各地の工業学校が工科大学（TH）に昇格し始めていた。けれどもギムナジウム卒業生では自然科学系知識が不足して工科大学にはついていけず，かといって第2級実科学校卒業生はラテン語を学んでいないため，やはり無理であるという状況が生まれていて，第1級実科学校への期待は高まるばかりだったのである[2)]。

ハウスクネヒトが来日する前に勤務していたのは，ベルリン・ファルク・実科ギムナジウムであったが，実は彼が就任した1882年4月1日のその前日の3月31日に，プロイセンの全中等学校を初めて統一的に規定した「中等学校教則」が出されていた。そしてそれによって以前の第1級実科学校は実科ギムナジウムとして位置づけられ，計10時間ラテン語が増加されることによってギムナジウムの1種として正式に認められたばかりなのであった。けれどもこの「教則」においても，ラテン語は教えるがギリシア語を欠く実科ギムナジウムには大学入学資格は与えられなかった。1883年の新「医学試験規則」も，実科ギムナジウム関係者の期待に反して，ギムナジウム卒業生にしか医学研究を許さなかったのであった。

なおドイツの実科ギムナジウムや上級実科学校は，「実科学校および高等市民学校の教授・試験規程」（1859・10・6）が規定するように決して「専門学校」などではなくて，大学教育は必要としないがより程度の高い職業のために「学問的教養の準備」をする学校であり，ギムナジウムとの間には，「原理的な対立」は無いことになっていた。従ってこれらへの入学は，民衆

2）梅根悟監修『世界教育史体系』25（中等教育史）（講談社，昭和51年）155頁。

学校からではなく特別の予備学校からなされていたのである[3]。

さて1882年の「教則」によれば，実科ギムナジウムの外国語は，入学第1年目（Sexta）からラテン語，第2年目（Quinta）からフランス語，第4年目（Untertertia）から英語が始まっていて，かなりハードなカリキュラムとなっていた[4]。

他方すでに改革実科ギムナジウムというのが存在していたが，そもそも改革学校とは，低学年からのラテン語学習の重圧から生徒を守り，コース選択をもっと後に延ばす目的で，ラテン語のない3年間の基礎段階を作ってその部分を他の種類の中等学校と共通にするギムナジウムや実科ギムナジウムのことである。

その最初のものは1878年にシュレー（Schlee）によってアルトナ（ハンブルク近郊）で始められた。1898年3月1日段階で32校存在していた改革学校のうち19校がその方式であるというフランクフルト方式のゲーテ・ギムナジウム（Reinhardt校長）は，1892年に4番目に開設された改革学校である。アルトナ方式とフランクフルト方式とでは細かな異同はあるが，両方式とも，3年間の基礎段階の後，3年制の実科学校と6年制の実科ギムナジウムとに分化していく点では全く同じであった[5]。

そしてフランクフルト方式の実科ギムナジウムでは，入学1年目からは，10歳前後という年齢の生徒によりふさわしいと考えられた「生きた言語」としてのフランス語のみが教えられ，ラテン語は第4学年（Untertertia）から，そして英語はようやく第6学年（Untersekunda）から課されていた。

ドイツ中等学校史のこのような流れの中で，キールの上級実科学校の校長

3）以上，Steinbart, Realgymnasien, W. Rein h. g., *Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik*, Bd. V (1898) 参照。

4）梅根悟監修『世界教育史体系』12（ドイツ教育史Ⅱ）（講談社，昭和52年）47頁参照。

5）Knabe, Reformschulen, W. Rein h. g., *Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik*, Bd. V (1898) 参照。

ルッペは近代派に属し，市長のフスも彼の影響を受けてフランクフルトを視察した結果，同校の第4学年から上にフランクフルト方式の改革実科ギムナジウムを併設することになった。1897年春のことである。近代語教育で知られていたハウスクネヒトが招かれた1900年は，こうした組織改革の後まだ日も浅い時だったのである。

ところでハウスクネヒトが日本からドイツへ帰国途中の1890年12月に開催された学校会議で，実科ギムナジウムの正当性を主張する持論を展開して頑張った少数派が，ハウスクネヒトが在学中に教育学を担当していたベルリン大学教授F．パウルゼンであった。彼は，この種の中等学校が不可欠であること，ラテン語は必要だがギリシア語は学ばなくても就ける専門職があること，軍人職がそうであり，事実，実科ギムナジウムのカリキュラムが士官学校での将校の訓練に採用されていることなどを訴えた。特に最後の点は，カイザーが極めて敏感になっていることなので言ってはならないと特に警告されていたことであった。「同じテーブルで少し離れた所に座っていたカイザーは，ほとんど威嚇的な様子で彼の冷たい青い目を私に向け続けていた」という[6]。

けれども会議の結果は，2つの古典語とも教えるギムナジウムと，古典語を全く教えない上級実科学校のみの公認であった。結果的には存続こそ容認されたが，その中間にある実科ギムナジウムは「生存権」すら奪われかけ，逆に上級実科学校卒業生には，大学で数学と自然科学を学んだり，工科大学へ進学したり，中等学校教員試験を受験できたりとか，その他もろもろの特権が与えられたのであった[7]。

学校会議が，9年制の3種の中等学校の卒業生に平等に大学入学資格を認めるべきだとの結論にようやく到達したのは，1900年6月開催のそれにおいてであり，この結論は11月26日の「キール勅令」によって裁可されるに至っ

6）Albisetti, *ibid*, p. 223.

7）Steinbart, a. a. O.

た。

従って1903年に，キールの改革実科ギムナジウムの最初の４人の卒業生が生まれた時，彼らの前にはあらゆる可能性が開かれていたのである。1901年制定の新教科課程では，ギムナジウムと実科ギムナジウムの双方でラテン語が６時間増やされ，上級実科学校では歴史・地理が４時間増え，この結果，３種の中等学校に大学進学資格が与えられて，「40年ちかくにわたってくすぶっていた論議に終止符を打つ」という「画期的な変化」が生じていたからである。「経済界，技術界，軍部の要請に，保守的な教養市民層ももう反対できなくなっていた」のである[8]。そのために同校の1902／03年報でハウスクネヒト校長は，今やかなり誇らしげに，父母たちに対し次のように述べることが出来た。「改革実科ギムナジウムの卒業証書は，総合大学（神学は当分の間は除外されているが）や工科大学，鉱山アカデミー，林業アカデミーでの総ての種類の学業，また陸・海軍将校……，郵便，通信，鉄道，銀行，税関・税務関係の中級官吏への国家試験受験に対し有効である」と[9]。

新転機を迎えた直後のこのギムナジウムに招聘されて，ハウスクネヒトはそれなりの意気込みを持って新しい学校運営に乗り出していった。例えば，1901年の６月26日から７月３日まで，教員のハイエル（記念写真の前から２列目，向かって右端）が上級クラスの生徒達30名を引き連れてザクセン地方およびハルツ山地へ最初のいわゆる「修学旅行」を行なったが，これはハウスクネヒトの提案に基づく新行事であった。機械製造工場や製塩所，セメント工場，化学工場，鋳物工場，さらにまた温室，マグデブルクの大聖堂などの見学をし，ハルツ山中で地質学的な探索をして歩き回ることが，日程の総仕上げであった。この企画が大成功だったことは，その後も毎年ハイエルが修学旅行を繰り返していることが証明している[10]。

8）M. クラウル著，望月幸男他訳『ドイツ・ギムナジウム200年史』（ミネルヴァ書房，1986）116頁。

9）*Geschichte der Humboldt-Schule in Kiel*, s. 46.

10）*Ebenda*, s. 90.

ハウスクネヒトは芸術教育の分野にも力を入れ，「1901年の新カリキュラムによって図画教育は全く新しい姿に，つまり絵画教育にまでなり，墨や絵の具が使用されるようになった」と，1903年1月7日付けの報告書で彼自身が書いている。またこの頃に音楽教育も，単なる唱歌教育を乗り越えたのであった[11]。20世紀への転換期，いわゆる体操はフットボールを中心とした様々な球技スポーツ競技へと緩やかに移行しつつあり，実科ギムナジウムでも事情は同じであった。ハウスクネヒト校長は1903年，「フットボールの大きなボールに窓が剝き出しになっており，割れることが不可避である」からと，トイレの窓に格子を付けることを教育行政当局に要請したけれども，「窓の破壊を可能な限り避け，より一層注意することが望まれる」という助言以外に何も得るところはなかったという。当局の理解はまだあまりなかったけれども，1905年には初めての対外球技試合のためにフレンスブルクとレンツブクルクへ遠征したことが報告されている[12]。

Ⅳ

ハウスクネヒトがキールで校長をしている間に，何人かの日本人が学校を訪問している。彼の就任は既に述べたように1900年4月20日であるが，1900／1901年報によれば，早くも8月10日には東京からやって来たススメ・ミノブチ教授が若干の教室で授業参観をしている。また11月28日には，東京帝国大学での彼の学生で，当時は文部省参事官（Regierungsrat）であるというトノスケ・ワタナベが，1901年1月には東大での元同僚であったという男爵ナイブ・カンダ教授が上級実科学校を訪れたという。[1]

これらの日本人とは誰のことであろうか。ススメ・ミノブチとは，1895（明治28）年，帝国大学文科大学哲学科を卒業後，1900（明治33）年当時東

11）*Ebenda*, s. 93.

12）*Ebenda*, s. 94.

京高師教授をしていた溝淵進馬（みぞぶち・しんま，1870〜1935）のことであろう。彼はちょうどそのころヨーロッパ留学中で，1900年9月から1901年8月まではプラハ大学に在学していた[2]。

この頃の文部省参事官でトノスケ・ワタナベといえば，渡部董之介（わたなべ・とうのすけ，1865〜？）しかいない。1900（明治33）年4月1日付の『職員録』で，図書審査官・参事官であることが確認できる（明治30年11月12日から31年10月22日までは文部省図書局長）。しかも彼はハウスクネヒト在職中の1889（明治22）年に文科大学哲学科を卒業していた。渡部が滞欧中，やはり留学中の谷本富に出した絵葉書がいくつか残されている（龍谷大学所蔵）。

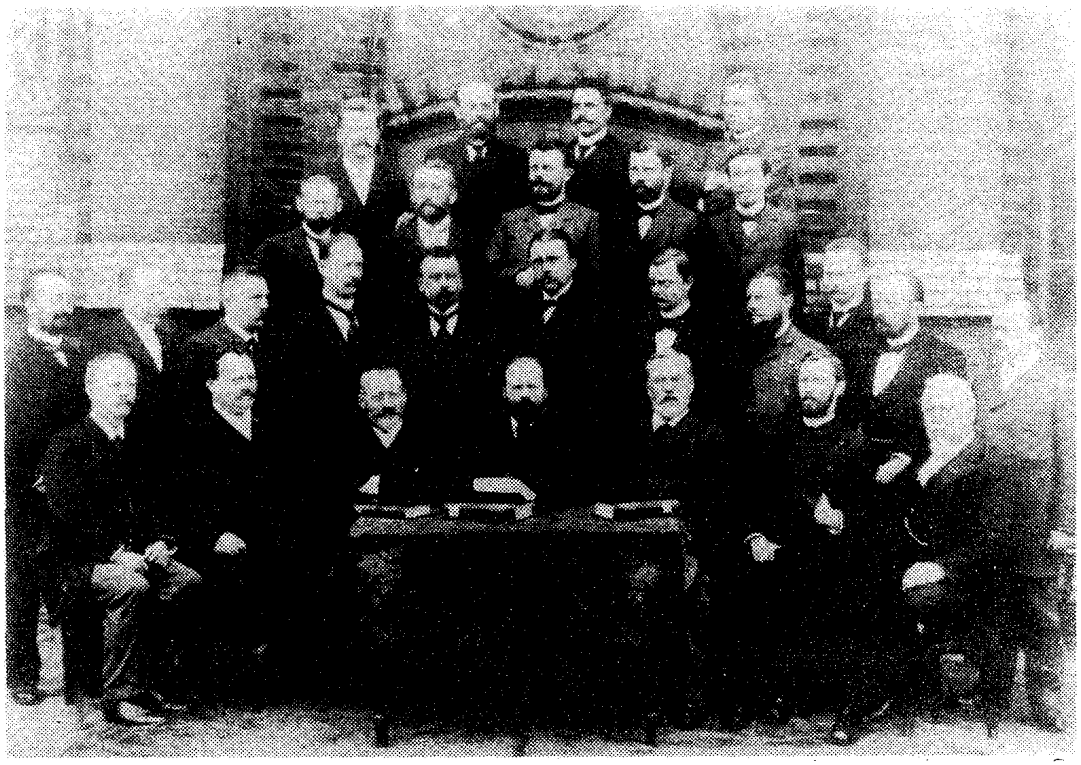
ナイブ・カンダは，15歳から8年間をアメリカで学び，その後日本の英語教育界に大きな功績を残した神田乃武（かんだ・ないぶ，1857〜1923）のことである。1899（明治32）年4月21日，東京外国語学校長になった神田は，翌1900年6月，文部省から1年間イギリス・ドイツへの留学を命じられ，主に英語教授法の研究をして回った。そして「獨逸のハウスクネヒト等とは特に其家に寓して意見を交換せられ，各地の英語教授を見學し，其間大に得る所がありました」と伝えられている[3]。

実は神田には，彼が留学中につけていた英文日記が残されている。それによると，1900年11月19日にアムステルダムから夜行列車でドイツに入り，オスナブリュックで乗り換えて，ハンブルクを経由し，20日の朝10時57分キール到着である。ハウスクネヒトの所で泊まるように招かれていたが，彼自身は所用のため翌々日にならないと帰って来ないということであった。21日には，改革実科ギムナジウムのシェッピヒ（Scheppig）（記念写真でハウスクネヒトの向かって右隣）に招かれてレストランへいっている。22日と23日には，ハウスクネヒトを迎えにアネサキと一緒に駅まで行ったけれども，彼は帰っ

1）*Geschichte der Humboldt-Schule in Kiel*, s. 66〜67.

2）溝淵進馬『教育学講義全』冨山房，明治42年，130頁。

3）長岡擴「神田乃武先生の略歴」，『英語青年』50巻11号（大正13年3月1日）324頁。



ハウスクネヒト校長（前列中央）と教員集団
（1900年撮影）
（フンボルト・シューレ所蔵）

て来なかった。

ハウスクネヒトが帰って来たのは25日の早朝2時であった。彼は出来るだけ長くキールに留まるように神田に勧めた。26日，神田はハウスクネヒトの同僚教員クルム（Krumm）（記念写真の前列向かって左から2人目）を訪問し，彼の家に引っ越す相談をし，28日に実際に引っ越した。これは決してハウスクネヒトとの仲が悪くなったからというのではなく，恐らくハウスクネヒトは独身で住居が狭かったからではないだろうか。クルム家には，奥さんと娘が一人いて，「ドイツ語を聞いたり話したりするのに都合が良い家庭の中についに住めて嬉しい。月175マルクで，家族と一緒に食事をする。私の部屋は狭いが，家族の総ての部屋が私のために開放された」と喜んだのである[4]。神田はその後，ハウスクネヒトや彼の同僚たち，とりわせクルム（一家）と親しく交流を続け，ちょうど2ケ月間キールに留まった。

その間，12月5日には生徒たちのコンサートを聞きに，12月22日にはクリスマスを兼ねた終業式に出席するためにハウスクネヒトの学校を訪れている。『フンボルト学校史』に記載されているのは，1月になって5度，9日・10日・12日・16日・17日に，英語や博物，フランス語，数学などの授業を参観した時のことである（50分授業）。

神田は，その都度の参観記録を日記に残しているので，ハウスクネヒトが行なった英語の授業の様子や，彼の性格がよく分かる1月12日の箇所を紹介する。

> 実科ギムナジウム。オーベル・ゼクンダ（第7学年）。18歳くらいの少年10人。教室は小さいが，換気・照明は良好。床はオイルがひかれ，きれい。黒板は平板な木製，スポンジおよび布の黒板消し，通常のチョーク。英語のクラス。ハウスクネヒト博士は，ほとんど総ての時間を，教科書の内容に関する質問を英語でするのに使った。教科書は彼が書いた『英語学生』

4）Kanda Memorial Kommittee ed., *Memorials of Naibu Kanda*, The Toko-shoin, Tokyo, 1927, p. 381.

であった。時間の終わりに，“Thanet had been given them by the French”と黒板に書いて，文法的な構造を説明し，それからそれを能動態に変えさせた。この部分では彼はドイツ語を話した。批評。ハウスクネヒト博士は，時折，非常に大きな声で，そして極めて厳しく話すので，生徒たちは時には幾ぶん困惑するように見えた。生徒が間違った答えをした時には，彼の口調は余りにも辛辣に思えた。彼の批評を受けて赤面した生徒が一人以上いたのに気づいた。生徒たちは，本を開いたままであった。彼らは非常によく質問に答えた。その発音もまた全体として良かった。英語を学び始めて2年目である。彼らは『英語学生』のみで訓練を受けてきた[5]。

そしてよく晴れた1901年1月21日，4時52分発の汽車で彼はキールを発ってハンブルクへ向かった。駅にはハウスクネヒト，クルム婦人と娘，他に一人が見送りにきた。その後も神田は，ハウスクネヒトから幾つかの紹介状を送ってもらってドイツの学校を訪問し，また1901年7月10日にも，大英博物館にハウスクネヒトを訪ねて再会をした[6]。

ところで神田は，この時の英・独を中心としたヨーロッパ留学から帰国後，直接法ないしオラル・メソッドの推奨者となり，日本における英語教授法の一転機を作り上げたのである。その神田が，この留学のドイツ滞在中につけていたノートの1冊に次のような新教授法メモが残されている。ハウスクネヒトらとの交流から刺激を受けて書かれたものであろう。

(1) 新教授法の主たる特徴

1．始めは純粋の口頭授業。

2．最初から可能な限り外国語を使用し，それを貫徹。

3．上級クラスを除いては，自国語から外国語への翻訳は絶対に，あるいは部分的に排除。

5）*ibid*, p. 387～388.

6）*ibid*, p. 468.

4．外国語から母国語への翻訳は最少限に。

5．年少クラスでは絵画を広範囲に使用し，一般に物事を出来るだけ具体的に。

6．広範な「実科」(Realien) 授業，つまり外国の生活，習慣・制度，地理，歴史・文学。

7．読本に関して常に会話。予習，あるいはより頻繁に復習の形で。

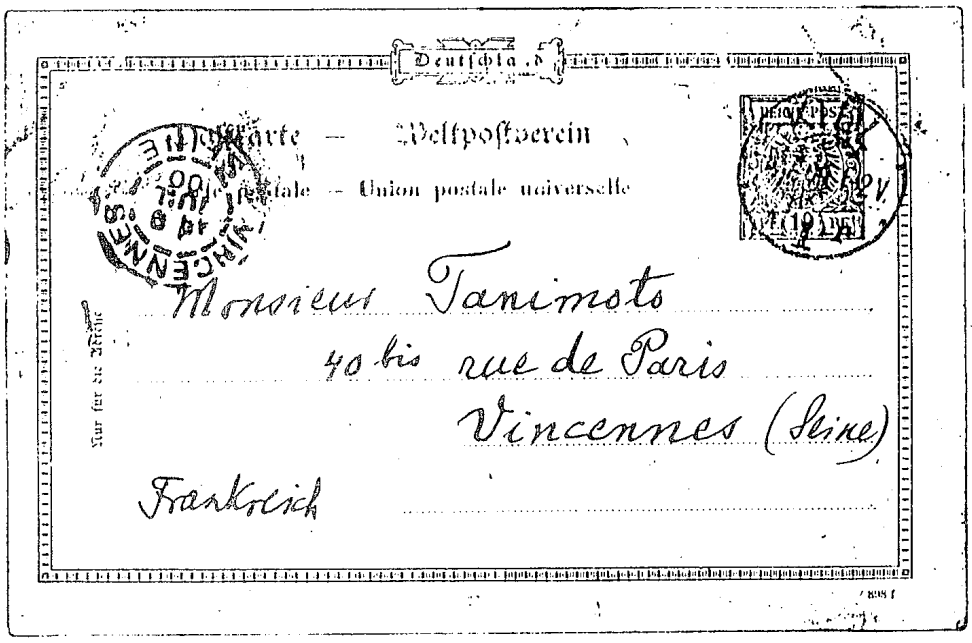
8．文法を帰納的に学ぶための材料としての読本の使用。

(2) ドイツにおける近代語教師の養成（省略）[7]

ハウスクネヒトから学んだヘルバルト主義教育学を日本に広めるうえで最も功績のあった谷本富は，1899（明治32）年から1903（明治36）年にかけて欧米諸国を歴遊したが（当時，東京高師教授兼文部省視学官），1900年7月，パリ郊外のヴァンセヌ滞在中に思いもかけず，彼はかつての師ハウスクネヒトからフランス語で書かれた次のような葉書を受けとった。

貴方のご消息に接し，非常に嬉しく存じています。
貴方のご躍進を，そしてまた貴方のご才能のゆえに，お国において，貴方が獲得なさるべくして獲得なさいました大成功を，心からお慶び申し上げます。貴方のご消息につきましては，キールにしばらく滞在し幸い私宅にもお寄りになりました加藤氏から，詳しく教えていただいたのでございます。私も月末にはパリに参り，貴方にお目にかかりたく存じます。それは

7）*ibid*, p. 168. 日本英学史学会編『英学事始』（エンサイクロペディア・ブリタニカ・日本，1976，247頁），それに基づいた唐澤富太郎編著『図説教育人物事典』（中巻）「神田乃武」（ぎょうせい，昭和59年，1012頁）は，この考えが神田の“English in Middle Schools”（1896）の中で述べられているかのように書いている。そうとすれば，これはドイツ留学前の主張になってしまう。しかし本当は，始め雑誌『太陽』（明治29年2月）に掲載された“English in Middle Schools”が“*Memorials of Naibu Kanda*”に再掲載された時に，ドイツでのこのメモが編集者によって注としてつけ加えられたのである。


Deutsche Reichspost

Postkarte — Weltpostverein

Carte postale — Union postale universelle

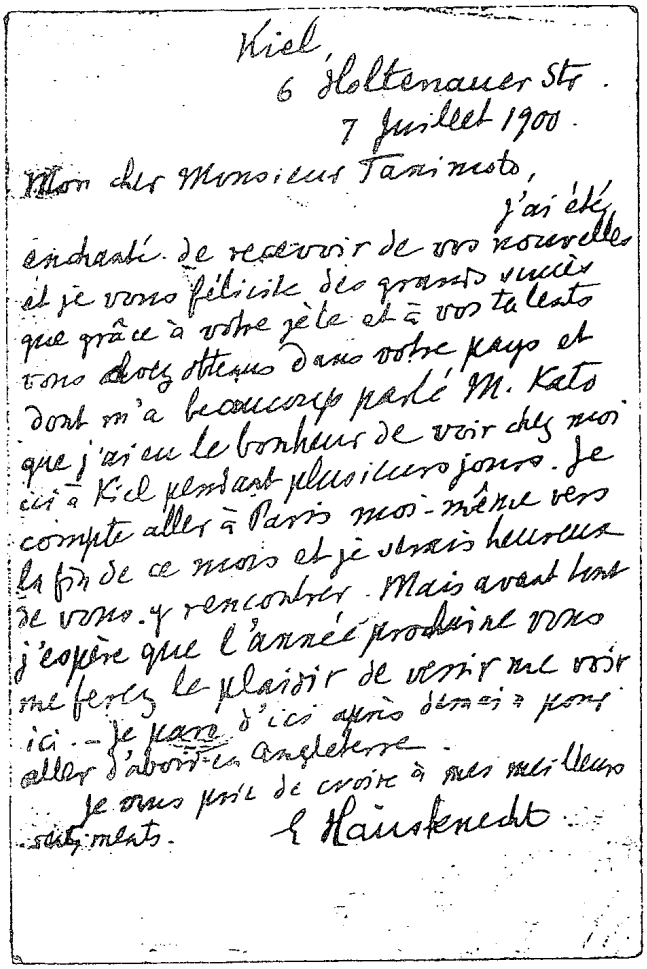
Nur für die Adresse

Monsieur Tanimoto

40 bis rue de Paris

Vincennes (Seine)

Frankreich


Kiel,
6 Holtenauer Str.
7 Juillet 1900.

Mon cher Monsieur Tanimoto,

j'ai été enchanté de recevoir de vos nouvelles et je vous félicite des grands succès que grâce à votre zèle et à vos talents vous avez obtenus dans votre pays et dont m'a beaucoup parlé M. Kato que j'ai eu le bonheur de voir chez moi ici à Kiel pendant plusieurs jours. Je compte aller à Paris moi-même vers la fin de ce mois et je serais heureux de vous y rencontrer. Mais avant tout j'espère que l'année prochaine vous me ferez le plaisir de venir me voir ici. — Je pars d'ici après demain pour aller d'abord en Angleterre.

Je vous prie de croire à mes meilleurs sentiments.

E. Hausknecht

ハウスクネヒトが，フランス・ヴァンセヌ滞在中の谷本富に送った葉書
（1900年7月7日付）
（龍谷大学所蔵）

ともあれ，来年には貴方がこちらにいらして，私にお会い下さるよう，願っております。私は明後日，まず英国にむかって旅立つ予定でございます。

1900年7月7日

キール，ホルテナウエル通り，6番地

エミール・ハウスクネヒト

（龍谷大学所蔵，赤瀬雅子本学教授訳）

文中に出てくる加藤氏とは誰のことであろうか。谷本はヴァンセヌ滞在中にライプチヒの加藤駒二から，ハウスクネヒトと会って「同人より非常の馳走を受」けたとの絵葉書と（1900年9月12日付），またライプチヒ滞在中にキールの加藤政治から，本日ハウスクネヒト先生とあって貴兄の話をしたと知らせる絵葉書（1901年4月14日付）とを，つまり2人の加藤から受け取っている。しかしその日付から推測して，ここでの加藤とは駒二のほうであろうと思われる[8]。

それはともかく，谷本が喜んでハウスクネヒトと再会したことは言うまでもない。1906年当時，「先年獨逸留學中は招かれて其邸内に賓客として二三週間も滞在致候事有之，毎々錦地の風光人物など噂致候て，懐舊の情難禁様見受候」[9]とか，「夏三週間許り厄介にな」り，「やがて其処を立つに就いてハウスクネヒト氏も一所に送つて来て呉れた」[10]といった記述を残している。

また谷本がフランス滞在中に受け取った，例えば，ハウスクネヒトと「邂逅」するために，ベルリン着後，キールへ向かうとの金子（？）某からの絵葉書（1900年10月31日付，ナポリから），フクハラ某および E. Hausknecht と一緒にいるというK．ヤマグチからのドイツ語の絵葉書（1900年12月30日付，

8）加藤駒二は教育雑誌記者。加藤政治は，明治30年東京帝国大学卒業，32年破産法研究のためドイツ・フランスに留学，36年帰国し東京帝国大学法科大学教授。

9）谷本富「京都帝國大學に於て」，山口高等商業學校學友會『学友会報』33号，明治39年6月23日。

10）谷本富『新教育講義』明治39年，昭和48年復刻，玉川大学出版部，19頁。

ベルリンから）などから推測すれば，ハウスクネヒトを訪ねていった日本人は，その他にもかなりいたのではないだろうか。

なおハウスクネヒトはフランスともコンタクトを持っていて，1902年3月1日にはフランス文部省から「文化勲章」を授与され，シュレスヴィヒ文部大臣が，それを受け取り身につけることを許可した旨の文書が残されている（SAK, 1902・7・15)。また，彼がのちにこの学校を辞める時の辞職願には，「フランス文化勲章受賞者」という肩書も併記されていた（SAK, 1906・4・2)。

さて以上のようにハウスクネヒト新校長は，着任そうそうから次々と訪問してくる多くの日本人の接待をしなければならなかったが，彼を待ち構えていたやっかいな問題のひとつに校舎改築のことがあった。ハウスクネヒトは，それまでの世界体験に基づいてかなり「無遠慮に」教育行政当局に働きかけた。そのために種々の「つまらない動機からの困難」を味わわなくてはならなかった。彼は就任直後から，主校舎と体育館との間を，大きな特別教室棟を建てることによって接続したいとの計画を持っていた。ただ単に新しい教室を作るためだけではなく，空き地に入って来る強い風を遮り，さらに体育館に必要な控室を設けるためでもあった。

彼は自分の計画に，同僚教師の意見も添付した。アスムス（記念写真の最上段左から2人目）は，11×22mしかない体育館がいかに狭いか，体育機器を壁に沿って収納することがいかに難しいか，生徒更衣室の設計がいかに間違っているかを述べ，さらにヴァグナー（記念写真の前から2列目右から2人目）は，体育館では電灯が必要なことを付け加えている。「館内の避けがたい振動の結果として白熱ガスマントルが落下したり，あるいは非常にたやすくホコリまみれになって暗くなってしまうので，白熱ガス燈による照明は良くない。不十分な照明は体操する生徒の生命にとって危険である」と[11]。またそこでは，鉄のストーブを体育館から無くしてセントラル・ヒーティングを導入することや，新しい100mトラックの建設も希望されていた。

---

11) *Geschichte der Humboldt-Schule*, s. 57.

アメリカでカレッジの豪華な体育館や体育設備を見ていたハウスクネヒトにしてみれば，気は焦るばかりであったであろう。しかしキール市の発展は空き地を高価な建設用地に変貌させ，体育のための用地購入は容易ではなくなっていた。増築案への賛成を得られなかった彼は，５年後に再び動き出す。彼が1906年２月６日付で市役所に提出した請願書は，「極めて陰鬱な色調で」教室棟の状況を描いている。そこでは非常に足が冷え，ストーブはくすぶり，総ては余りにも狭くて見通しは悪く，11本の煙突が校庭の空気を汚染していると。彼は，教室棟を全く新しく，第２体育館をもった２階建の校舎に建て直すことを提案したため，当局が視察を行なったけれども，結局は，いつか何等かの対策が講じられる必要があるという点で合意が見られたに過ぎなかった[12]。

ところがその２～３週間後には市役所の上級実科学校委員会が積極的な姿勢に変化して増築案を作り，ついに1909年春には，電気照明，低圧蒸気暖房，強制換気装置を備えた14教室を持ち，さらに化学教室，天窓方式の絵画ホール，博物教室その他を備えた，当時としては極めて近代的な新校舎が出来上がったのである。その時にはすでにハウスクネヒト校長は，後で述べる事情により学校を去っていたが，「極めて熱心に究極的な建築のために尽力した」彼の功績は無視できないと、『フンボルト学校史』には記されている[13]。

V

ハウスクネヒトがキールの改革実科ギムナジウムを去った理由を，学校の1907年報はもっぱらその健康上の点から説明している。「（彼は）ひどく衰弱していた健康の回復のために，すでに1904／05年度に、かなり長い休暇を取らなければならなかった。しかし残念ながら，総ての職務から解放され，南

12）*Ebenda,* ss. 57～58.

13）*Ebenda*, ss. 58～59.

部高地の空気の中に2ケ月間滞在しても，患者の健康状態に持続的な好い影響を見ることは出来なかった。ゆえに1905／06年度の終わりには，6ケ月間の休暇と1906年10月1日付での年金退職を願い出るように医者から勧められることになったのである。ハウスクネヒト校長とともに，改革学校の最も熱心な支持者，最も真剣な擁護者であって，その名前は外国でも評判が良かった1人の男が職を去ったのである」[1]と。

確かに彼は，1905年2月20日，「完全に疲労困憊して仕事ができない」と，医師の診断書をつけて3週間の休養休暇願いを当局に提出し許可されていた(SAK)。しかし，同年9月には，ベルギー文部省の依頼を受けて，同国で開催される世界経済発展国際会議の教育分科会で講演をするため，9月23日から30日まで休暇が欲しい旨申請するほどに健康は回復していたのである(SAK, 1905・9・9)。

彼の辞職の陰には，実は単に健康上の理由とだけは言えないもう少し複雑な事情が存在していたのである。

つまり彼の強引な学校運営が，色々な所で問題を引き起こしていたのであった。例えば1903年の皇帝誕生日には，場所が狭いという理由で上級実科学校委員会のメンバー全員には招待状を出さず，その代わり他の「友人と後援者」を招いて怒りを買ったりしている。まさしく「教育行政当局との関係がハウスクネヒトの下で混乱させられて，校舎増改築計画もまた思うように進まなかった」のであった[2]。

彼は，控え目に発言することによって人を自分の側に引き入れるといった芸当の出来る人間ではなかった。従って教師たちの間でさえ，彼に対する不満が発生し，最後には「皇帝の時代の臣民精神の時期に全くもって想像も出来なかったような前代未聞のことが起こった」[3]。つまり教師集団が反乱を

1) *Jahres-Bericht des Reform-Realgymnasiums mit Realschule am Knooper Wege*, Kiel, 1907, s. 15.

2) *Geschichte der Humboldt-Schule*, s. 67.

3) *Ebenda*, s. 68.

起こしたのである。

1906年2月2日，教師集団の最年長者としてシュトルツェンブルク教授（記念写真でハウスクネヒトの向かって左隣）が代表して，極めて詳細な苦情書をシュレスヴィヒ地方学務局へ提出した。プロイセンでは1826年以来，中等教育行政のための学務局が各地方に設けられていて，その長は地方長官（普通は法律家）が兼ねていた。そしてここがアビツア試験を行ない，教員の異動その他をとり仕切っていたのである。

シュトルツェンブルクはハウスクネヒトの独裁ぶりを具体例を挙げて攻撃し，校長の「ひとを傷つけ専制的で思いやりに欠けたやり方に対する，個人としてのあらゆる抗議も今まで全く効果がなかったので」，耐えられないくらいになっている「この状態に終止符を打ちたい」と懇請したのである。嘆願書には，予備学校の教師を含めて29名の同志の名前が列記されているが，これは2人を除いた（1人は休暇中）常勤教師の全員なのであった。

嘆願書はまず，ハウスクネヒト校長は，＜校長は同僚を同僚として援助し，何か不都合があればまず寛大な方法で注意喚起すべきである＞という，地方学務局の「中等学校長に対する訓令」の第18・19条をずっと無視してきたことを指摘している。その典型として挙げられているのは，ちょっとしたミスでも，当事者の説明も聞かずに一方的に書きつけ，そのことによって「たとえ名前は挙げられなくても，個人をさらし台にかける」「伝達簿」のことである。ハウスクネヒトは『山口高等学校教則説明書』で，各教員間の連絡を良くするためと，「級教員長（学年主任のこと）ヲシテ容易ニ當該級ノ功程ヲ概覧セシメ且ツ一般ニ教員ヲ監督スルノ用ニ供ス」ために「教場日誌」を備えることを提案していたが（同説明書47頁），彼はこれを校長自身が記入する形で実行したのである。代表者や教員会議が何度もこれを止めるように求めたにもかかわらず，遂に聞き入れられなかったという。

その他，教員無視の学校運営の実態が，教材・教科書，教員用図書雑誌の決定，教員室の移動，学校礼拝の中止など，重要事項の決定から教師集団が完全に締め出されていること，学校祝祭日，休暇の開始，授業担当や時間割・

その変更，会議予定などの各種の伝達が最後の瞬間になるまで行なわれないことの2面から報告されている（以上SAK, 1906・2・2）

2月9日にはシュトルツェンブルクは，同様の嘆願を市役所と上級実科学校委員会に対しても行なった（SAK)。当局が狼狽したことは想像に難くない。会議が開かれたが具体的な結論は出なかった。ところが約2ケ月後の1906年4月2日に，既にみたようにハウスクネヒト自身が，病気を理由にして半年間の特別休暇と10月1日付年金退職を医師の診断書をつけて願い出たのである。ところがこの退職願いには，以下のような条件がつけられていて，ここにも，彼の強引な性格がよく出ている。

a）年金額は少なくとも5000マルク。

b）年金額に応じて寡婦・孤児扶助金が計算されること。

c）年金および寡婦・孤児扶助金は，私の健康回復後，再度なんらかの仕事あるいは地位をキール市の公務以外で見つけることができた場合にも支払われること。

さらに彼は，「私が，大きな2つの学校の校長としての任務という過大な仕事のために健康を犠牲にしてきた事情，私がキールに来た時には完全であった私の生命力も，市から私に委任された課題の重圧と困難な諸状況の下で今や早くも破壊されてしまったという事情を考慮してもらいたい」ともつけ加えていた（SAK, 1906・4・2)。

翌日，市当局（市長のフス他2名）は異例の秘密会を開いて，半年間の特別休暇，10月1日付年金退職，万一の場合の寡婦・孤児扶助金の支払い，年金額5400マルクを決定し，ハウスクネヒトには同日，その旨，および条件のc）については法規の規定によることが口頭で伝えられ，彼は了解した。そして4月6日，市長のフスが正式に文書で通告した[4]。

なおキール市の人口増のためハウスクネヒトの学校もどんどん膨張し，1890年当時567人であった生徒数も，1905年2月1日現在では829人となっていた。その内訳は，3ケ年の共通基礎クラスおよび3ケ年の実科学校が381人，第4学年から上の改革実科ギムナジウムが169人，3年制の予備学校が

279人で，教員は校長以外に30人である[5]。そして1907年２月には900人を越える勢いであった。そこでキール市は，ハウスクネヒトが特別休暇に入った直後の５月に，実科学校を改革実科ギムナジウムから分離することを決定し，翌年４月に実行した。教員のうち15名が，新学校に移籍した[6]。ハウスクネヒト騒動が分離を早めたと言えよう。かくてハウスクネヒトは学校を去ることとなったが，その時なお市長に対し，自分は自由意志で辞職するのだということを新聞を通じて公表してほしいと要望している（SAK, 1906・４・３）。辞任式についての記述は，年報には何もない。

ところが，独身のはずのハウスクネヒトが寡婦・孤児扶助金の要求をするのはおかしいということになったのであろう。市学務局が1906年８月11日になって，結婚の日付と配偶者の誕生日を彼に問い合わせた。その回答によれば，1905年10月７日結婚で，誕生日は1879年10月17日である（SAK, 1906・８・11)。ということは，ハウスクネヒトは52歳の時に26歳年下の26歳の女性と結婚したことになる。また問い合わせがあった４日後の８月15日には息子が生まれ，のちに追加報告ということになった（SAK, 1906・９・21)[7]。

ところで，キールでハウスクネヒト校長はどのような経済的待遇を受けていたのであろうか。1900年４月１日の就任時は基本給7200マルク，家賃その

4）5400マルクという年金額は実は高すぎで，法的には4248マルクでよいことが後になって分かり，当局内で問題になったが（SAK, 1907・４・29)，結局5400マルクが年４回に分けて支払われ続けた。また年金受給資格勤務年数の中に，キール以前の，しかも日本での在職年数も算入することは採用時に決まっていたにもかかわらず，全く不可解なことにキール市は，1907年８月22日の県の決定に反対して提訴し，県の裁定委員会によって「理由なし」と却下されている（SAK, 1908・２・15)。

5）*Jahres-Bericht des Reform=Realgymnasiums mit Realschule amKnooper Weg, Kiel über das Schuljahr 1904-1905.*

6）*Geschichte der Humboldt-Schule*, s. 49.

7）のちの別の文書によれば，ハウスクネヒト夫人の名前は Marguerieta，息子の名前は Karl Raimund である。

他手当1000マルク，計8200マルクで，1906年4月1日からは，基本給は同じ7200マルク，家賃その他手当1600マルク，年功加俸300マルク，計9100マルクである（SAK, 1906・10・1）。

1906年当時のプロイセン民衆学校教員の平均年収は，都市部で1916マルク，農村部で1460マルクであり，ギムナジウム教員の場合は1909年以降で，2700～7200マルクだったという[8]。従ってハウスクネヒトは，ギムナジウム教員給のうちでもその最高給を得ていたのである。

また神田乃武は，キールを訪問していた1900年11月30日に換金した時，295円が約600マルクであったと記している[9]。このレートを使って計算すると，就任時の8200マルクは4032円，退職時の9100マルクは4474円，年金の5400マルクは2655円となる。当時の日本の高等官の年俸は，1898（明治31）年10月22日改定の「高等官官等俸給令」（勅令第309号）によると，内閣総理大臣＝9600円，各省大臣＝6000円，各省次官・内閣書記官長・法制局長官・製鉄所長官＝4000円，各省局長3000円である（同日官報）。従ってハウスクネヒト校長の給与がいかに恵まれたものであったかは，ここにおいても分かるのである。

VI

1906年9月29日にキールから消えたハウスクネヒトの姿は，10月にはフランス語圏スイスのローザンヌに現れる。1537年にアカデミーとして設立され，1890年以後大学となったローザンヌ大学哲学部の英語・英文学の員外教授（ausserordentlicher Professor）に招聘されたからである（54歳）。ローザンヌ大学の記録では1906年からになっているが，『ドイツ大学年鑑』に初め

8）Rainer Bölling, *Volksschullehrer und Politik*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1978, s. 24.

9）*Memorials of Naibu Kanda*, p. 381.

て彼の名前が載るのは，1907年９月付の序文がある1907／08年冬学期版からであり[1]，その前の1907年夏学期版（1907年３月付序文）には無い。また『キュルシュナー・ドイツ文学年鑑』における彼の肩書が，それまでのキール改革実科ギムナジウム校長からローザンヌ大学教授に変わるのは，最初に見たように1908年版（1907年12月20日付序文）からである。

彼の招聘にどのような経緯があったのかは，今のところ分からない。しかしキールを去る前に事前にキール市にローザンヌでの仮住所を届けているので（SAK, 1906・９・21），校長在職中あるいは休職中にその話があったことは間違いない。『文学年鑑』1908年版によれば，住所は先に届けられたのと同じ 14 Rue Beau-Séjour であったが，翌年版からは，96 Avenue d' Ouchy に変わっている。

彼が大学でどのようなテーマの講義をしたかは，『ドイツ大学年鑑』に記録が残っているので知ることができる。この頃のハウスクネヒトに関する数少ない資料なので，以下その題目を列挙しておこう。

◎1907／08年冬学期

チョーサーとその時代，英語教育の種々の方法，古代英語文献講読，マクベス

◎1908年夏学期

バイロンの生涯とその作品，チョーサー，シェークスピア（ハムレット）

◎1908／09年冬学期

バイロンと湖畔詩人たち，古代英語講読，講読（チョーサー），バイロン精選作品講読（英語使用）

◎1909年夏学期

1）Th. Scheffer／G. Ziegler (hrsg.), *Deutscher Universitäts = Kalender* (begründet von Oberbibliothekar Prof. Dr. F. Ascherson), 72. Ausg., Winter-Semester 1907／08, Leipzig.

英国ロマン派詩歌解説，バイロン戯曲講読（英語使用），チョーサー（英語使用）

◎1909／10年冬学期

英語の歴史的文法，演習（英語使用），ミルトン第1期の作品「コーマス」および若干の他の韻文についての解説，シェークスピア「ヴェニスの商人」講読

◎1911年夏学期

英語演習，英文学・英国史，英語ゼミ（1700年以前の作家解説）（英語使用）

◎1911／12冬学期（？）

◎1912年夏学期（？）

◎1912／13年冬学期（？）

◎1913年夏学期

英語ゼミ（ミルトン「闘士サムソン」の解釈と翻訳），英文学・英国史（英語使用），英語演習（発音）

◎1913／14年冬学期

英文学1620～1700年，ドライデンの風刺詩解釈（英語使用），英語の歴史的文法，実用的演習

◎1914年夏学期

1400年以前の英語文献，シェークスピア「テンペスト」講読，英語演習

◎1914／15年冬学期

実用英語演習，シェークスピアの「冬の夜の童話」講読，古代英語講読，演習・復習

◎1915年夏学期

実用英語演習，シェークスピアの「シンベリーン」，17世紀の英文学

◎1915／16冬学期

17世紀の英文学，1700年以前の英語文献，この時期のテーマに関する口頭・筆記演習，英語演習

ローザンヌ時代のハウスクネヒトがどのような生活を送ったかは，残念ながら不明である。ただ，湯原元一が1907（明治40）年ころの話として残した次のような回想があるのみである。「それから瑞典に行つてハウスクネヒト氏をロザンに訪うた折り，昔話に一夜を明かして，墺太利に於ける經験や，氏の二十餘年前の豫想が我が國に於てよく實現されたことを話したら，氏は滿足この上ないといつて大いに喜ばれた。私はこの場合に氏の我が教育界に對する功績を思ひ出さずにはゐられぬ」[2]。ここで湯原が「氏の二十餘年前の豫想」といっているのは，かつて彼がハウスクネヒトを訪ねた時に，「氏が私にリンドネルの原書を與へて，もしこれが日本に紹介さるれば，日本の教育界は必ず一變するといはれた」[3]ことを指している。

ローザンヌ時代にハウスクネヒトが作ったフランス語教科書に，『話そう・書こう』（*Parlons et Composons*, 1912）（全5冊プラス写真・絵画冊子）がある。表紙裏および裏表紙裏に書かれた解説の中で彼は，フランス語作文は他のあらゆる外国語の場合と同様に，翻訳ということの敵対物であるとして，次のように主張している。

翻訳主義が蔓延しはびこっている所では，外国語の作文は決して進捗しない。逆に初めからゆっくりと，多面的な「より自由な訓練」とりわけ文の変形・書き換えが行なわれていく所では，作文は必ず成功する。「翻訳主義は，外国語の学習においてはただ単に論理的・文法的法則のみが大切なのではなく，いやむしろ心理的要素，とりわけ言語感覚がもっと重要であることを見逃しているのである。翻訳主義は，極めて純粋に文法的，翻訳的に，そしてまた純粋に知的に言語に到達しようとすることによって，かえって非科学的になるのである」。母国語からの翻訳は，中級段階で，しかも限られた範囲でのみ行なわれるべきである。

2）国民教育奨励会編『教育五十年史』大正11年，184頁。

3）前掲書，182頁。

面白いのは，この教科書においても，ハウスクネヒトの愛国主義が顔をのぞかせる点である。この教科書の方法を使えば生徒はこうなると，彼の長年の経験が確信にまでなった事の中に，「ドイツ人の祖国愛を確かなものにし高め」というのがあった。また解説の結びの言葉は，「文学的に極めて恵まれたフランス人の，洗練されて完成された美しい言語の修得のために」と並べられた次の句であった。「祖国に奉仕するドイツの若者の精神的武装のために」。

ハウスクネヒトはローザンヌ大学において，古代英語から実用英語まで幅広く英文学・英語関係の授業を続けてきたのであるが，1916年夏学期，そして1916／17年冬学期は，休講となっていて，それ以降は『大学年鑑』から名前自体が消えてしまった。谷本富も「余輩が再度の留學の時は（ハウスクネヒトは）ロザンス大學に英文學の助教授たりき。開戦後杳として消息を聞かず」と書いている[4]。

実はほとんど信じられないことに，彼は62歳の高齢をもって自ら志願し，ドイツに戻って1915年10月16日に兵役に就いたのである。後備軍中尉として月俸 280マルクであった（SAK，1915・12・22)。したがって彼は，ローザンヌ大学の記録では1916年まで在職となっているが，すでに予告した1915／16年冬学期の授業をしなかったことになる。

彼の祖国は第１次世界大戦のまっただなかにあった。しかし，「それにしてもなぜ」という疑問は消えない。あるいはキール時代におけるような同僚との不和・対立とか，いつまでたっても正教授になれないことへの不満があったかも知れないが（彼は辞職まで員外教授のままであった)，事情はよく分からない。谷本もまた，彼は「一種の人格にして或は多く世と相容れられざるの憾なしとせず」[5]との感想をもっていた。

ただハウスクネヒトが非常な愛国主義者であったことは，すでに見てきた。

4）谷本富『最新教育学大全』上，同文館，大正12年，26頁。

5）同上書，26頁。

日本で彼が主張した教育理念とか，『アメリカの教育制度』などいくつかの証拠があった。彼が英語のこれからの重要性を強調したのも，ドイツの経済的発展のためであったし，また来日直後に，祖国有事の際に帰国するための旅費を要求したりしていた。そういう彼が，安閑としてスイスに留まりえない状況が第1次大戦によってできていたことは確かであった。

彼は近衛後備軍最高統帥部中尉となってダルムシュタットの捕虜収容所で通訳官として働き（SAK, 1915・12・24），1917年1月1日からはギーセンに移ると同時に大尉に昇官し，月俸も595マルク（年額7140マルク）に昇給した（SAK, 1918・5・2）。けれども1918年8月にはドイツの敗戦は決定的となり，また国内だけで80万人もの餓死者を生み出すに至った。そして10月29日には，ハウスクネヒトのかつての町キールに水兵の反乱が起こり全国に波及。ついにヴィルヘルム2世は11月9日オランダに亡命して，ここにドイツ帝国は崩壊してしまった。11月16日除隊した傷心の愛国者ハウスクネヒトは，家族の住むローザンヌに再び戻り，住所をそれまでの 96 Avenue d'Ouchy から 76 Avenue d'Ouchy へと変えた。

ところで当時，1888年6月1日の省令によって，軍人給の $^{7}/_{10}$と年金額との合計が退職当時の給与（ハウスクネヒトの場合は9100マルク）を越えないかぎり，この $^{7}/_{10}$給が年金に付加されることになっていた。中尉時代は問題なかったのであるが，ギーセンで大尉になって年俸7140マルクを受けるようになると，その $^{7}/_{10}$は4998マルク，年金との合計は10398マルクとなって，9100マルクを1298マルク越えてしまっていたのである。このことに1918年6月になって気づいたキール市は，1917年1月1日から18年6月30日までの1年半の間に支払い過ぎた1947マルク（1298× $^{3}/_{2}$）を，1918年7月1日から3ケ月に100マルクの割りで3ケ月毎の年金1350マルクから減額することにした（SAK, 1918・6・12, 12・5）。

ハウスクネヒトはこの減額は承認したけれども，しかし同時に，除隊した1918年11月16日から18年12月31日までの $^{3}/_{2}$ ケ月間に減額された額の復活を，次のような計算式を書いて要求した（SAK, 1918・12・30）。

$1298/12 \times 3/2 = 162.25M$　　$1350 - 100 = 1250$

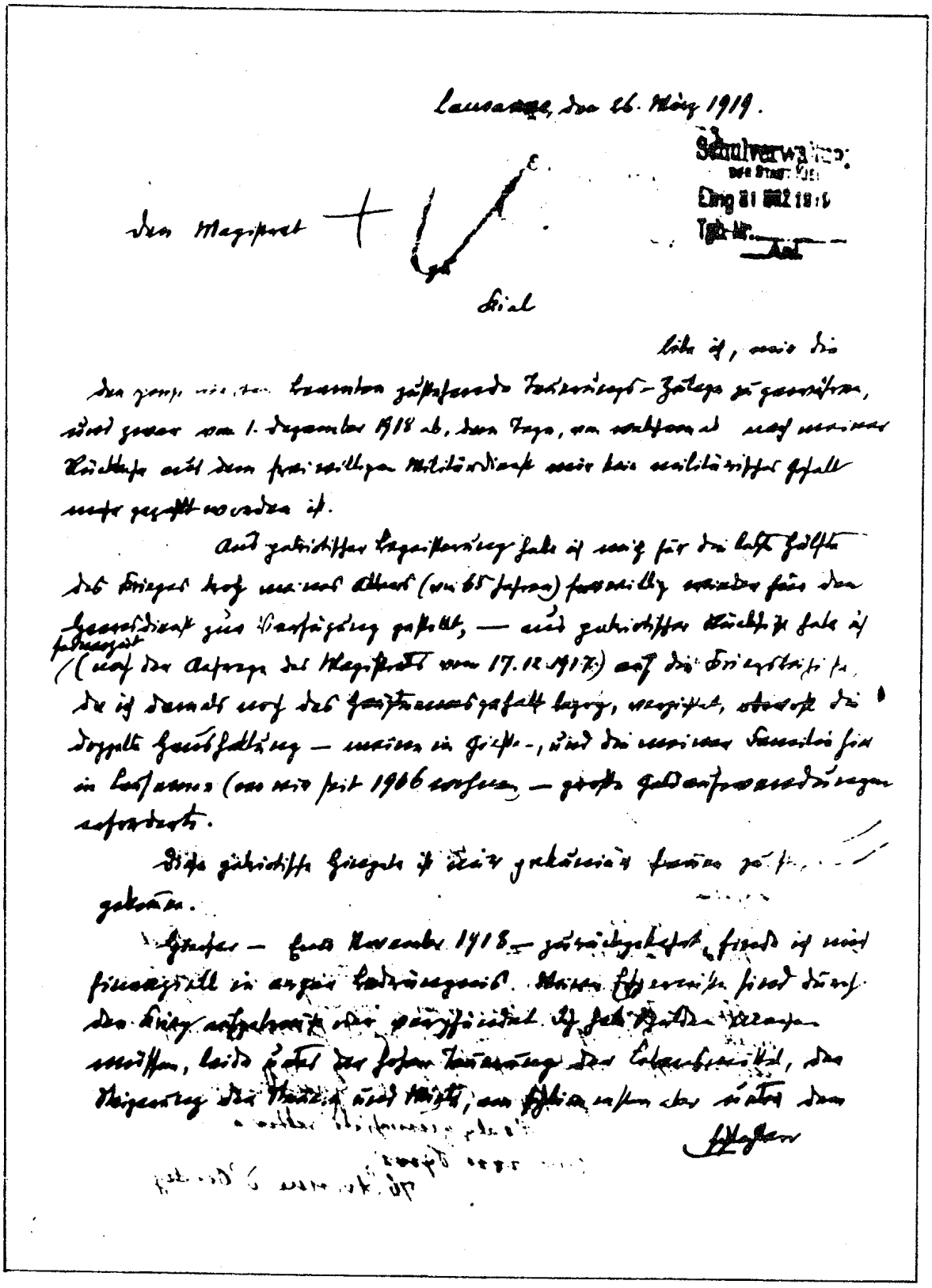
$1250 + 162.25 = 1412.25$

ハウスクネヒト自身，「この計算がもし適切でないならば，適正化して下さい」とのべているように，この要求は全く理屈に合わないものであったけれども，キール市は1918年12月から年金の全額を支払うことを認めることにした（SAK, 1919・1・13)。

1919年3月26日，ハウスクネヒトは，年金生活の元公務員に支払われている物価手当の支給を要求する手紙をキール市役所あてに書いた。実科ギムナジウム退職時の年金要求書におけるような恩着せがましさは全く消えて，そこにはただ生活の窮状が切々と繰りかえし綴られているのみである。

愛国的な熱狂から私は，戦争の後半，65歳（本当は62歳）という自分の年齢にもかかわらず，志願して再び兵役に身を捧げました。愛国主義的な考慮から私は，他方では，1917年12月17日の市役所からの指示によって，戦時援助金（7/10給のこと）を放棄してきました。2重の家計，つまりギーセンでの私のと，ここローザンヌでの私の家族のと，は大きな支出を必要としていましたけれども，当時私はまだ大尉給を受けていましたので放棄したのです。こうした愛国主義的な献身は，金銭的には高いものにつきました。1918年11月末にここへ戻ってきて，私は財政的にひどく困窮しています。私の貯えは戦争のせいで使い尽くされ，あるいは抵当に入っています。私は借金をしなくてはなりませんでした。そして生活用品の高騰，税金や家賃の上昇のために，極めて苦しんでおります。しかもその上，マルク相場は最悪なのです。100マルクが現在では46フランにしかなりません。以前は123.50フランだったのに。現在の資力で生計をたてることは不可能です。

たとえ，現在の悪くて高い交通や生活用品の事情，そしてまた劣悪な居住状況の下のドイツへ帰国することを考えたとしましても，現在の私には移住の費用をかき集めるだけでも全く無理なのです。まだ返済することができていない借金のことを全く考えないとしてもです。



Lausanne, den 26. März 1919.

Schulverwaltung
Eing. 31 MRZ 1919
Tgb.-Nr. ____ Anl.

Dem Magistrat

Kiel

bitte ich, mir die
den ganzen [illegible] Kaiserlichen Zulage zu gewähren,
und zwar vom 1. Dezember 1918 ab, dem Tage, an welchem ich nach meiner
Rückkehr aus dem freiwilligen Militärdienst mein bürgerliches Gehalt
mehr gezahlt worden ist.

Auch gesundheitlich bin ich wenig für die harte Hilfe
des Krieges hier meines Alters (von 65 Jahren) freiwillig wieder für den
Heeresdienst zur Verfügung gestellt, — auch gesundheitlich bin ich
(nach der Anfrage des Magistrats vom 17.12.1917) auf die Dienstzeit
zurückgekommen, die ich damals noch des Hauptmannsgehalts bezog, wegzieht, obwohl die
doppelte Haushaltung — meinen in Gifhorn, und die meiner Familie
in Lausanne (wo wir seit 1906 wohnen) — große Geldaufwendungen
erfordert.

Diese gesundheitliche Hinsicht ist [illegible] gekommen.

Ferner — seit November 1918 — gesundheitlich fühle ich mich
finanziell in ungünstiger Lage. Meine Ehe wurde durch
den Krieg aufgehoben oder gänzlich. Ich habe [illegible]
müssen, leide später der [illegible] Tätigkeit, die
Steigerung der Preise und Mieten, [illegible] später den

Hochachtend

生活の窮状を訴えて物価手当の支給をキール市に要求するハウスクネヒトの手紙（1919年３月26日付）

（キール市公文書室所蔵）

[illegible]

[illegible] Preise der Mark (100 Mark = jetzt 46 Franken, früher Fr. 123,50). Es ist mir unmöglich mit meinen jetzigen Mitteln auszukommen.

Selbst wenn es ausgeschlossen wäre, unter den jetzigen Schwierigkeiten über Lebensmittel und Nahrungsmittel einzuführen in Deutschland an einen Rückkehr nach Deutschland zu denken, so wäre es – ganz abgesehen von den hier eingegangenen Verbindungen, die ich zur Zeit nicht erledigen könnte – für mich jetzt ganz unmöglich, auch nur allein das Geld für die Übergangskosten zusammenzubringen.

Mein Pfarrgehalt beträgt 5300 Mark; hiervon habe ich in diesem Jahre wichtig 55% eingezahlt und den Rest, 1800 Mark, habe ich etwa noch 45% davon erhalten.

Meine Frau zu Hause hat im Laufe des Krieges auf 3000 Mark [illegible] gehabt: auch hiervon habe ich im Laufe des vergangenen Jahres 45% [illegible] erhalten.

Ich habe einen [illegible] Sohn – 12 Jahre alt.

Frau Raiser und Hausknecht, geb. 15.8.1901 zu Kiel.

Als vorhandenen Grund beantrage ich die Genehmigung [illegible] Beurlaubung, da mir [illegible] durch [illegible] vom 1.12.1918 ab, von dem Tage ab, [illegible] nachgem ich die militärischen [illegible] [illegible] beziehe.

Professor Dr. Emil Hausknecht,
[illegible]
Lausanne, Schweiz,
76 Avenue d'Ouchy

私の年金は5400マルクですが，昨年のマルクの低相場によってそのたっぷり55%を失ってしまい，したがって45%しか受け取っていないのです。その他の収入は戦争のために，3000マルクにまで縮まり，しかもまたマルクの不利な相場のせいで，そのせいぜい45%しか，事実としては入らないのです。

私には，12歳のまだ生活力のない息子が一人おります。Karl Raimund Hausknecht，1906年8月15日キール生まれです。

以上のような理由により，経常的な物価手当を，私が軍人給を全く受けなくなった1918年12月1日に遡及して支給下さるよう願い出る次第です（SAK，1919・3・26）。

ハウスクネヒトは1918年12月1日以後，基本金1080マルク＋息子への108マルク，計1188マルク（年額）の戦時補助金を受けていたが，この願いにもキール市は応え，1188マルクの½の594マルクを希望どおりに遡及して支給することにした（SAK，1919・4・7）。

Ⅶ

結局ハウスクネヒトはドイツに帰った。いつの時点かは不明であるが，1920年7月14日付文書での住所は，Mäthlowahof，Rathenow になっている（SAK）。ラーテノーというのは，ベルリンの西北西80km，彼の生まれ故郷ノイ・ルッピンからは南西にわずか45kmの町である。

その後のハウスクネヒトについて湯原元一は，「今や氏は獨逸に歸りて長子を一人相手に老をベルリン郊外に養ひ，頗る不如意な生活をしてゐられる由にて，目下舊門下生，舊縁故者等相謀つて，聊か慰籍の意を致さうと計畫中である」と書いているが[1]，これは1922年時点での話である。

1）国民教育奨励会編『教育五十年史』大正11年，184頁。

ところがハウスクネヒトはその5年後，1927年12月19日にロンドンで客死した。1927年12月24日（土）付の『ザ・タイムズ』に，彼の死亡記事が載っている。ハウスクネヒトが当時のイギリスでどのように評価されていたかがよく分かる。

ハウスクネヒト博士

シャッフツベリの作品を研究するためにロンドンを訪問中のエミール・ハウスクネヒト博士は，先週の日曜日にハムプステッドで突然亡くなったが，彼は前世紀の80年代90年代におけるプロイセン中等教育改革運動の指導者の一人であった。ベルリンの実科学校の校長をし，すぐれた英語学者であり，生きた言葉を教えるための直接教授法を完成させた彼は，ドイツの中等教育に，そしてまた間接的にイギリスの中等教育にも大きな影響を与えた。彼は，プロイセンの高等学校（Higher Schools）卒業証書授与試験のために，レポート，テスト，論文作成そして viva voce（口頭試問）の手続きを詳細に決めた，現存する無二の報告書を書いた。イギリスに対する彼の称賛は，たぶん不本意な時もあったであろうが，誠実なものであった。彼が，国会通りの教育庁特別調査局の窓から，ヴィクトリア女王60周年記念祝典の行列を眺めた時，独りため息をついて言った。「途方もない力だ！」と。

彼が亡くなったとされるハムプステッド（Hampstead）というのは，リージェント・パークとユーストン駅との間にある通りの名前である。どのような状況で死亡したのかは不明であるが，この記事から，74歳になってなお英文学研究のためにロンドンを訪れていたこと，大学教授としての紹介は全くなく，外国語の直接教授法の確立者として有名であったことなどが分かる。

彼が眺めたヴィクトリア女王（1819〜1901，在位1837〜1901）の在位60周年祝典の行列は，1897年6月22日に行なわれたが，ハウスクネヒトがエディンバラ大学へ近代語教授法の講演に招かれた時期に当たっている。この祝典

は，車イスに乗った78歳の女王自身の肉体的衰えこそ隠せは出来なかったけれども，50周年祝典と並ぶはでやかな「大英帝国の祝賀」となった。彼女がバッキンガム宮殿を出発したことを知らせる最初の大砲がハイド・パークで鳴り響いたちょうどその時，それまでどんよりしていた空から太陽が顔を出し，それはあたかも「女王の天気」の伝説を保証するかのようであった。すべてが終わった時，あちこちの丘に設けられた灯台に火が点じられた。その数は，50周年祝典の際の4倍近くの2500にもなっていた。「同じように，彼女の晩餐のテーブルの上のランの山の高さは，前回4フィートであったのに対し8フィートにも達し，さらに大英帝国中から可能な限り取り寄せられた6万種もの花によって飾られていた」という[2)]。

また，バッキンガム宮殿からセント・ポール大寺院へ向かう女王の馬車の行列には，世界中の植民地からやって来た大勢の代表団が加わっていた。「そのときロンドンっ子たちは，おそらく初めて，自国の領土がまぎれもなく『地球の果てまでも』広がっているのを実感した」のである[3)]。愛国主義者ハウスクネヒトの口から，深いため息が漏れたのも無理はなかった。

なおこの死亡記事が載った『タイムズ』の日付と曜日（24日，土曜日）も示すように，ハウスクネヒトが死亡したのが「先週の日曜日」だとすれば，それは12月18日ということになる。しかしフンボルト学校に残されている次のような死亡広告では19日と書かれている。

> すべての親戚，友人，および知人の皆様へ
> 私を深く悲しませることには，私が心から愛した父
> エミール・ハウスクネヒト教授・博士
> 前・ローザンヌ大学教授

2）Elizabeth Longford, *Queen Victoria — Born to Succeed*, Harper & Row, 1964, p.547, p.549.

3）L・C・B・シーマン著，社本時子・三ッ星堅三訳『ヴィクトリア時代のロンドン』創元社，1987年，217頁。

キール改革実科ギムナジウム校長
退役大尉は，
享年74歳をもって，1927年12月19日
滞在中のロンドンで逝去いたしました。

Charles Raymund Hausknecht
Caixa Postal "Q"
Curityba, Brasilien.

1922年頃にベルリン郊外でハウスクネヒトと暮らしていたと湯原が伝える息子は，英語名に名を変えてブラジルに移住していた。この時，まだ21歳である。ハウスクネヒト夫人の消息は全く分からない。谷本も湯原も夫人のことは何も書き残していない。「一件書類」においても，その誕生日以外は何も書かれていず，わずかに，年金をいつも振り込んでもらっていたベルリンのドイツ銀行の口座名義（Dr. Emil Hausknecht と Frau Marguerieta との連名）から（SAK, 1918・12・30），その名前をうかがい知ることができるのみなのである。

おわりに

ハウスクネヒトは，現代においてもそう多くはないほどに，極めて精力的に世界を駆け巡った人間であった。ではその精神がコスモポリタンであったかといえば決してそうではなく，むしろ激しい愛国主義者であった。その少し過剰ぎみの自信と杓子定規的な理想主義とは，その熱心さにもかかわらずよけいな摩擦をあちこちで生み出さざるをえなかった。

彼の世界経験からすれば，日本滞在の3年半というのはほんのわずかな時間でしかなかった。しかもいわゆる教育学者としての彼の活動は，74年の生涯のうち，ほとんど日本滞在中のみであった。にもかかわらず日本の教育学

行なう先鞭がつけられた。初めてヨーロッパ教育学が体系的に持ち込まれ，ヘルバルト主義の異常な隆盛のきっかけとなった。そしてまた，彼によって日本の近代教育学の基礎が作られたといっても過言ではない。ハウスクネヒト死亡の2日後の『タイムズ』(1927・12・21) には，「彗星，英国ではいまだ観測できず」という記事が掲載されているが，彼はまさしく日本の教育にとっては，ある日突然に海の彼方から飛んできて，大きな持続的衝撃を残してすぐまた消え去っていった彗星のような存在であった。

付　記

本稿は，1987年度前期の海外特別研修の成果の一部であるが，今後の課題としては，とりわけハウスクネヒト日本招聘についてのドイツ側資料，および彼のローザンヌ時代の資料の発掘が残されている。

また本稿のための資料収集その他において，特に下記の機関および人々からの援助・助言を受けた。記して深く感謝したい。

Archivdirektor Dr. Jensen (Stadtarchiv Kiel)

Oberstudiendirektor Dr. Kobligk (Humboldt-Schule, Kiel)

Prof. Walter Lenschen (Université de Lausanne)

Dr. Botho von Kopp (Deutsches Institut für Internationale Pädagogische Forschung, Frankfurt a. M.)

Institut für Weltwirtschaft der Universität Kiel

Dr. Katharina Reimann (大阪外国語大学)

龍谷大学図書館

寺崎昌男東京大学教授

榑松かほる桜美林大学助教授

(1988. 11. 29　受理)